

である。——「實驗論理學」一七一頁。

なほ次にひくデューイの言葉をこの節の結論とする。

「思考内容あるひは意味がそれ自身の妥當性をもつことについてはこれだけにしておく。思考内容あるひは意味はその妥當性を孤立した、また與へられた、また靜的のもの、としてもつのではない。それはそれをその動的關係に於てもつ、經驗の後の運動を決定する役に立つか立たぬかによつて決定する。言葉をかへていへば、統合された經驗の進化に於てそれがしの役目をつとめるために選ばれて立てられた「意味」は、その意味のなすべく豫期されたことを、またその意味のなさうと意志したことを、なすかなさぬかを發見すること以外には、<sup>テスト</sup>試される道がないのである。——「實驗論理學」一七一頁。

### (三) 思考作用一般の妥當性

次にロッチェの問題となつたのは、思考作用一般の妥當性ないし客觀性の問題であ

る。ロッチェに依ると意味、觀念、といふものはいはゞ思考といふ建築に用ひられる建築用の煉瓦であるにすぎない。そしてつまりはさうした觀念の妥當なるものは觀念そのもののうちにあるところの本性ではなくて、さうした諸觀念の相互關係のものであるにすぎない。そして思考作用なるものはさうした相互の關係を建設する過程である、すなはちそこらに散らされてゐる各獨立の煉瓦であるところの諸觀念、諸意味、をまことの關係でしぼられた思考體系に組み立てることである。といふことになつてをるが、それではさうした思考作用そのものの妥當性はどうか。すなはち思考一般の諸様式の妥當性はどうか。たとへば定言的、假言的、選言的の判斷。歸納、類推、數學的等式に依る推理。分類や説明。かうした諸々の思考作用に依つて個々の諸觀念は組織づけられるわけであるが、かうした諸作用、諸様式、の妥當性はどうか、これがロッチェの第二の問題であつた。

一つの點ではロッチェはききまめて明瞭な説明をしてをる。それは思考作用一般には

妥當性の問題がないといふのである。思考作用そのものの様式はたゞ思考の過程のうちのみあつて、妥當な世界の構成の中にははいりこまない。思考作用がどのやうに行はれようとも妥當な真理そのものはちつともひびきをうけない。すなはち思考作用が成功しようとも失敗しようとも、その觀念の妥當性そのものには、何のひびきもない。妥當性は思考の内容の問題であつて、思考の活動の問題ではない。思考の活動は純粹にたゞ自ら自身の心のうちの内的運動であつて、それは私らの自然の故に、また私らの世界のうちに於ける位置の故に、私らに必要に行はれるものであるにすぎないと。

かう見ると思考作用そのものをきりはなして考へては妥當性ないし客觀性の問題はおこらない。思考作用はたゞその如くあるだけのことであつて、それ自身の限りではよいも悪いも、うそもほんとうもない、しかしその思考のはたらきを、その思考のはたらきの産出物に對してみるとときには、こゝに妥當性の問題が起つてくることになる。

これを説くにロッチェは二つの比喩を用ひてをる。一つは建築のはたらきから、一つは旅行から、とつたものである。そしてこのロッチェの見解は一種の道具主義ないし方便主義になつてをる。建築にはきつとなにかの道具がある、そとをとりまくたて物がある、足場がある。そしてこれらは最後の建築を完成するためになくてならぬものである、けれどもこれらは建築そのものの中にはいつてない。すなはちそのはたらきはその産出物に對して構成的價值はもたないけれども道具としての價值をもつ。また思考を旅行にたとへようなら、思考の目的物であるところの結論ないし結果ないし産出物はいはゞ思考の旅の見晴しのよい山頂である。旅行者が地上の様を見渡さうためには山の頂にあがらねばならぬ、そのやうに思考者が智の世界を見渡さうためにはその思考の山の頂にあがらねばならぬ。そしていづれの山の頂にのぼるにしてもだしぬけに頂に上りうるものでない。それには麓からの豫備の活動があるわけである。このやうな立場をとるロッチェはすなはち道具主義の見解をすでにいくぶんうけい

れてをる。デューイももとよりこの道具の主義の主張者である。こゝに二人のあひだに關係が見える。たゞその道具主義はこの二人に於て、かねての立場の異なるにつれて、相當に異なつてはゐる。

こゝにロツチェは、思考の内容と活動とをはつきりわけて考へ、活動をば内容の方便、道具、と見てをる。しかしデューイは内容と活動とを同じものに見てゐる。彼に依れば思考の産物「内容、觀念、意味」は思考活動の完成されたものであり、また一方から見て思考活動はうつつと永く續いてゆくそれ自身の實現過程の途中でうちきつて見られた産物である。してみるとこの二つは見られる立場が異なるだけであつてものは同じである。いまロツチェが、思考活動は思考の産物、すなはち思考の内容、道具であるといふ意味はあだかも、建築に於ける外的な足場や外圍そこがにひがその道具であるといふ場合のやうに外的道具の意味である。けれどもデューイに於ては、思考活動と思考内容とは一體の關係にあるものであるから、一つが一つの道具であるといふのは

内的の道具であるといふことである。しかしロツチェ自身もこの後の見解に本能的に手出しをしてをる。それは次にひくデューイの言葉にもいはれてあるとほりである。また次の言葉は活動と産物の關係、道具の意味、をきはめてあきらかにしてをるであらう。

「私は思考作用がげんみつに道具的なものであることを問題にするのではない。問題はこゝにはなうて、實は、道具の性質の解釋にある。ロツチェの立場の困難は、方便（道具）と目的とを共にまつたくなれたものでありながら、しかも必然的に相互にたよりあうてをる、と假定してをることである。——その立場が、見出だされるといふも、自己矛盾にあちてゐるといふことである。ロツチェは思考を外的意味に於ての道具たとへば自分の役目も仕事もその中にはないとこの建築を完成するためのたゞの足場、の如く見る見解と、思考を内的の道具、すなはち建築のまさしくそのはたらきの全きをなすに必要な一部のはたらきであり、またこれを以てしこれを通してしての

み有効に遂行されるところの思考活動のために立てられた足場、であると見る見解との、二つのあひだをゆれ動いてをる。そしてこのはじめの見解に於てのみ、足場はたゞの道具と考へられる。後の見解に於ては外的の足場は道具ではない。實際の道具はたて物を建てる活動である、そしてこの活動はそれ自身の構成要素として足場（のはたらき）をふくんでゐる。建築の仕事は完成した建築物と對抗して、目的に對するたゞの方便としてあるのではない。それは過程のうち<sup>たて</sup>に於てとられれば、すなはち歴史的に、縦に、時間的に見られれば、目的である。さらにまた、足場は建てる過程に對する外的方便ではなくてその有機的の一員である。「建築」といふ言葉が二つの意味をもつのは單なる言葉の偶然ではない——それは過程となされた産物との兩方を、同時に意味してをる。思考の結果はそれ自身の完成にもち運ばれた思考活動である。その活動は、一方から見て、それ自身の實現成就のはたらきの任意のところ<sup>たて</sup>で打ち切られた、またそれによつてなほ進んでゆく、結果である。」——「實驗論理學」二七七頁

かう見てくると思考の活動なるものはまた道具である。従つて思考の活動の妥當性はその道具としての役目をはたすところにある。その役目をはたす思考作用は妥當であるが、それをはたさぬものはさうでないといふことになる。

従つて活動としての思考の妥當性の問題は例によつて思考一般の妥當性の問題ではなくて、その状態状態に従うて起るその、この、特殊の思考活動の問題である。その、あるひはこの、思考活動でなしに思考一般すなはち一般的に見た思考の諸様式の妥當性なるものはたゞ思考をその思考の歴史的立場、その實在的脈絡、からきりはなして考へたときにはじめて起ることである。そしてこの如き見方のよくないことはこれまでにくり返し述べられてをる通りである。

かうした見解をさまたげるものはそこで思考を形式的にみるあやまりである。實在を全く見すた純粹形式論理學の純粹な思考一般の考へはもとより、思考一般と實在一般とを認める考へもこれについて邪魔である。ロッチェのしかし、心理的の聯想の

はたらきを思考に見る考へは、こゝにのべた見解に一步近づいたものである。これももう一步進めて「思考は特殊の客觀的諸内容の安排を通じて一つの目的に適合するはたらきである」(「實驗論理學」一七七頁)とみれば問題はまづたく解決する。

こゝに一つ注意をよんでおくことは道具と材料とはたらきとの一體關係である。これはすでにみたところであきらかなところであらう。すなはちはたらきは道具であり道具はまた材料になり材料はまたはたらきなのである。そこではたらきと道具と材料といへば別物のやうであるがしかし妥當な結論にいたるためにはこれら三つがまづたく一つに和合してはたらいてをるのである。

#### (四) 思考産物の妥當性

ロッチェにいま一つの問題がのこされてをる。それは思考の産出物の妥當性の問題である。ロッチェは(二)の項では思考のはじめにある觀念ないし意味の妥當性をみた、(三)に於ては思考活動がその産出物に對しての妥當性をみた。そこでハムロッチェ

に残る問題はこの最後の一つ、すなはち産出物の妥當性である。

妥當な觀念から出發し妥當な思考作用を通して出來たところの思考の最後のきはめて論理的な組織立てられた完全な觀念あるひは概念、があるとしよう。さてそこでこの最後の産物としての觀念、概念、意味、眞理、の妥當性はどこにあるか、その客觀性はどこにあるか。この問題はまさに起つてくる問題ではあるが、この道をとつては、永久に解けない問題である。獅頭半身龍尾の火を噴く怪物のカイミアラを私らは思考によつて次々に再構成してゆくとそれはつひにはギリシヤの神話の中の一つの獨立した觀念となつて止むであらう。けれども、そのやうに組織立てられた神話の中の一要素となつて止んだところでカイミアラも神話も眞理としての妥當をますわけではない。それはもとのまゝのそれである。私らが工夫に工夫をこらしてつくつた觀念もやはりこれと同じやうなものではないかと疑はれてくる。そこでなにかほかに客觀性が見出れねばならない、妥當性の標準がなければならぬ。ところがすべての意識に自己同一

な内容なるものをもつてきても役には立たぬ。幻覺や錯覺はそれをもつ人が多いからといつてその妥當性をますわけではない。

さてロッチェに従ふと。思考の窮極の産物もつまりは思考である。そして思考はどんな思考でもみな外部の實在で導かれるものである。といふ。例の幽霊は最後まで彼につきまとい、なやましてをる。たとへその究極の産物としての觀念が理想的に完全な妥當な思考であるとしてもどうして外部の實在に關係することができよう。思考と實在とのあひだになにか共有のかけ橋のないかぎり二つが係り合ふすべはないはずである。それを係りあはせるためにはロッチェは例の矛盾の力に依つて理論的のぐるぐるまわりをしてをる。そのぐるぐるまわりに氣附いたロッチェはとうとうこの最後の妥當性の問題を形而上學の境にほり込んでしまつた。しかも形而上の實在は何ら私らに知られてないものである。この知られてないものを標準にして思考の最後の産物の妥當性をはかるとはなんと愚かなことであらう。

それにしてもロッチェは形而上的、超絶的、の境にまつたく走るわけに行かない。それは思考のはじめと終りとに於て思考の歴史的な説明に手を出して、特殊の場合に起り特殊の場所に終ることを説いてをるからである。彼は思考の與件となる印象は外に獨立する世界の事物によつてつくられたものであるとみてをる。すなはち思考ははじめにそれを越えた世界に關係づけられてをる。それにかゝはらず彼は思考の獨立世界を明らかに區ぎつて説くことにつとめてをる。ところがまたその終りにゆくとまた思考外の世界に指をさしねばならなくなつてをる。しかもこのはじめと終りの説明はこれまでにみてきた通り歴史的發生的ないし心理的である。

こゝにしかし遂にロッチェのよい言葉がある。それは彼が進んで。經驗の特殊諸部分の眞理の尺度は、思考に依つて判斷されたとき、それら諸部分が他の諸部分と調和してをるかどうかを見るところにある。といひ、また。觀念の全世界を存在しないところの、(のちに觀念になるものであるといふことを除いては存在しないところの)、實

在と比べようとすることは無意義である。といつてをるところである。そこでもし既製の觀念そのものが外的な既製の材料そのものに一致するのでなければ知識は成立せぬといふ懷疑論の立場をもしかれがとつたら、彼も懷疑論者になるところであらう。が彼れはこの立場の假定を意味のないものとしてそれをさけてをる。「思考の仕事は經驗の種々の諸部分を調和させるところにあると彼（ロッチェ）の定義するのは正しい。この場合には思考のテストは實際につくられた經驗の調和または統一である。思考の妥當性のこのテストは思考を越えてある。そしてまた他の端では思考は思考以前の獨立の地位から起る。このまへと越えてとを歴史的意味に解釋するならば、すなはち他の諸事物の非知的諸經驗に對する關係に於ての經驗内の機能としての思考作用に依つて、占められる位置なされる役目、の事柄として解釋するならば、それならば、間にはいつて來るのまた道具的の思考の性質、思考の存在するために非反省的の先件のいること、その最後のテストのために結果の經驗のいること、が有意義になりまた必

要になる。大きくとつて、時間的の發達や支配からはなれるときには、私らは望みなく混雜したそしてひとりで回轉してをる形而上學の深淵の中に放りこまれてしまふのである。」——「實驗論理學 一八二頁。(、、、は私のつけたもの。)

以上はかなりくどくどとながくなつたが、それを一口にいへば、思考の産物としての觀念の妥當性のテストはそれと他の諸經驗との調和、諧調、統一にある。といふことになる。

##### 五) この節の總括

(このやうに妥當性は觀念と思考作用と思考の産物との三つについて考察された。けれどもこれはロッチェの所説を追ふためにこのやうになつたのであるにすぎない。デューイ自身の立場から見れば、つまりは觀念も活動も産物もその本質はおなじものであつて、たゞそのときの立場によつてこの三つの者の一つとして見られるにすぎない。のであるならば妥當性はつまりは一つである。それは道具性である。道具としての役

目をつとめるものはたしかなまことの觀念であることになる。もつとも道具の意味を内的意味にとらねばならない。

道具としてその役目をはたすことはつまりその状態にあつた混亂をとり除いてその經驗のうちに調和をもたらすことである。さう見れば妥當性はすなはちこの調和の問題である。

それから思考の絶對的に究極の産物といふはデューイの立場にはあられない。どんなに究極のごとく見えるものも、かりの究極のものであつて、また後の思考經驗にはいろいろのものである。したがつて究極のテストといふもなくなるわけである。

かくて妥當性ないし客觀性は、思考經驗の一段一段と進轉するにつれて、蛇が皮をぬくやうに、しかしいつまでも限りなく、一皮一皮とむいては、そのまことをますのであらう。

## 第八章 思考經驗全體の分析

—HOW WE THINK, CH. VI.

—Experimental Logic, Ch. III.

### 一、普通の論理の諸問題

以上第四章から第七章までは思考ないし認識について認識論的——（もつともデューイ自身は彼の説を認識論とはつきり區別してゐる、がそれにかゝはらず廣い意味から見ればやはり彼の所説も認識論的である）——に説いたものである。従つて普通の論理學で問題になるやうな部分はまだあまり説かれてない。

いま思考の性質に就いてのおよその認識論的の説明が終つたのでこれからは普通の論理學での問題であるところの歸納と演釋、判断、概念等について簡單に見よう。



そして普通の論理學ではまづ概念からはじまりそれから判断推理と進み、かつ演繹から歸納に説明がまし進められ、やがて知識の統一世界を構成しようとするのであるが、こゝにはまづ思考経験を全體としてとり、それを分析することからはじめて、次に歸納と演繹との組織的推理を、次に判断を、次に概念(觀念、意味)を説くことにする。そしてこれらに關することはおほかたみな「HOW WE THINK」の第二部にその材料を求めるのである。

もとよりこれからの數章に説かれるところも、たとへこれまでの形式論理學のありふれた問題ではあるにしても、すべてその説明の立場が異なつてをる。すなはち思考一般のはたらきとか様式とかいふ立場からでなしに、それぞれの特殊の狀位から起きてくる諸思考作用に就いての實驗的立場——インスツルメンタリズムの立場——からの説明である。

## 二、如實の思考

かくて思考は決して思考一般 (*Denken überhaupt*) ではない。それは狀位から湧いて出る如實の思考でなければならぬ。そこで私らはまづ第一にさうした思考を實際の經驗のうちに見なければならぬ。次にその例をあげる。(私の「論理學概論」第十七章の「具體の思考作用」を参照。(なほ次にあげる三つの例はデューイが學校の學生のかいて出したもののうちからほとんどその言葉をかへずにとつたものである。))

例一。「このあひだ私は十二街の町に出たをりふと時計が眼についた。その針は十二時二〇分をさしてゐた。これで私は一時に一二四街に約束のあることを思ひ出した。私は推理した——そこへやつてゆくのに地上の電車でゆくと一時間かゝるから、この同じ道をとつて返したらおほかた二十分間ほどおくれるであらう。地下の特急を利用すれば二十分を節約しうるかもしれない。だが近くに停車場があるだらうか、もしな

かつたら、それを見つげ出すのに私は二十分以上も費すかしのれない。そこで私は高架線のことを考へた、そして見ればそこに二つのブロックのあひだにそれらしい線がある。けれどもどこに停車場はあるだらうか？、もしそれが上手または下手に數個のブロックをへだててあるのであつたら私はかへつて時間ををくらすであらう。私の心はまた地下線に歸つてきてこれの方が高架線よりははやくと考へた。またそれ以上に地下線の方が一二四街の私の行かうとするところに高架線よりも近く行つてをり、従つて向ふで時間の節約ができるかと考へだした。そこで私の結論は地下線をとることになり、そして一時までに目的地につくことができた。

例二。私が毎日わたる川の渡し船の上甲板からほとんど水平に長い白い棒が突き出てゐて、その尖端には鍍金した球がついてゐる。はじめそれを見たとき、私はそれを旗竿かと思つた。その色、形、鍍金した球、はこの考へにあふやうである、そしてこれらの理由は私の考へが正しいことを證する如くであつた。ところがまもなく困難が

起つてきた。棒は水平である。これは旗竿として常ならぬ位置である。また次には旗をつける繩、輪、滑車がない。また、ほかの場所に旗を時々下げるらしい水直の棒が二本ある。それではじめの棒は旗をさげるためにそこにあるのではないらしい。

「そこで私はさうした棒の可能的なすべての目的を想像して、そしてそのどれに、それがもつとも適合してゐるかを考へることに努めた。——(a)それは裝飾でもあらうか。けれどもすべての渡し船やまた曳船までがみなそんな棒をもつてをる、そこでこの假設はすてられた。(b)それは無線電信の終局ターミナスでもあらうか。けれども前と同じやうな考へからさうでなさうに思はれる。なほまた無線電信の終局のもつと都合よい場所は船の一ばん高いところ、水先指導塔パイロットハウスの頂の上、であらう。(c)その目的は、船の動いてゆく方向を示すことではあるまいか。

「この結論のたすけとして、私はこの棒が水先指導塔よりひく、従つて水先指導者がそれを見るのが容易であることを發見した。またさらに、尖端は必要だけ基もとの

方よりも高くなつてをり、従つて指導者の位置から見れば、その棒はるか前の方を指してをるであらう。また指導者は船の前に近くをるのであるからその方向を定めるためにさうした補助物を彼は必要とするであらう。曳船もまたかうした目的のために棒を必要とするであらう。この假説は私の取りあげた他の諸假説よりもはるかにほんとうでありさうである。私は結論した——棒は指導者に船の向ふべき方向を示し、正しく舵をとりえさせるために、建てられたものであると。」

例三。「熱い石鹼水で大きなコップを洗うてすぐさま口を下にして平たい皿の上にふせた。すると泡がそのコップの口のそばから外へ出てきて、また間もなく中に引き込んだ、なぜであらう。そこに泡が吹き出たといふことから私は空氣のことを思ふ。そしてその空氣がコップのうち側から出てきたにちがひないと私はみる。皿のうへの石鹼水は中から空氣の出てくることをさまたげ、そのためにコップの中の空氣が石鹼水の泡となつて出るほかにしようがなかつたのであると私はみる。しかしなぜ空氣は

コップから出るのだらう。何も他の物質がコップの中には入り込んだために空氣が押し出されるのではない。だからきつと空氣がふくれたにちがひない。空氣のふくれるのは熱のますためか壓力の下るためか。また兩者の一緒に起つたためでなければならぬ。熱い石鹼水からとり出された後にコップが熱くなることがあらうか。もちろんコップの中にはいつてゐたまゝ石鹼水につかつてゐた空氣はその後に熱せられるはずがない。もし空氣が熱せられたためであるとするならば石鹼水からとり出して皿の上にふせるまでの間に、冷たい空氣がその中にはいつたのでなければならぬ。私はこれがいよいよ眞であるかをためすために他のいくつかのコップを石鹼水の中から取り出してみる。或二三のコップはきつとその中に冷たい空氣がはいりやうにして取り出す。また或るコップはとり出すときにその中に冷たい空氣がはいらないやうにするためにコップの口を下にむけてとり出す。すると冷たい空氣のはいつた方のコップからはその何れもから泡がふき出た、しかし冷たい空氣のはいらぬ方にはどれにも泡が出ない。

してみると私の推理は正しかつたにちがひない。外からはいつた空氣はコップの熱であたためられて膨張したのにちがひない、これは外へ泡の吹き出したのを明かに説明する。

「しかし何故にその泡が中へはいるのであらう。冷たくなれば收縮する。コップが冷へ、それにつれて中の空氣も冷へたのである。かくて中の張りつめた力が去つたのである。それにつれてその泡がひき込んだのである。このことを確かめるために、私はまだ泡が外へ出てゐる最中にコップの上に氷をのせてためしてみる。するとたゞちにあべこべに泡は中へ退く。」——「どう私らは考へる」六八—七二頁。

（この最後の例は如實の反省的思考を典型的に説明するものとして私はすでに他の書に引用してこゝには二重にはなつたことをことわる。

以上のうち第一の例はごく實際的な日常の處理である。第二の例は観察したものについての反省的思考である。第三の例は観察以上實驗（それもひろい意味の觀察の一種ではあ

るが）をもふくむ反省的思考の例である。そしてこの三つはきはめて具體的な思考作用から科學的な思考作用にいたるまでの思考の程度を三つに區切つてみたものである。

### 三、その分析——五つの段階

さてかうした如實の思考作用をみると私らはこの各例のうちに便宜上五つの段階を區ぎつてみる事ができる。すなはち「よくしらべてみると、どの例も明瞭さに多少の差はあれ、みな五つの論理的に別れた段階をもつてをる。——（一）感ぜられた困難。

（二）その場所づけと定明。（三）可能的解決と暗示。（四）その暗示の諸關係の、推理による開展。（五）その解決案の受客または拒否に導くところの、後の觀察と實驗。すなはち信念か非信念かの結論。」——「どう私らは考へる」七二頁。

なほデューイーはこの五つの段階をすこしちがつた言葉を用ひて、「民本主義と教育」——DEMOCRACY AND EDUCATION——の一七九頁にも論じてをる。（そしてこの如

實の思考の行かれる道程は子供の心をはたらかせる教育——教授ないし學習——に關係がある。がそれについては、「デューイ研究」の第一巻の第五章の一五二頁以下参照。

さて次に以上五つの段階について簡単に吟味してみよう。

(一) 感じられた困難、の段階

それは前の數章にやかましくのべた思考の先件のまづあたへられる段階である。すなはちそれ自らのうちに混亂をもつてゐて、その混亂のために思考がまづ呼び出されるところの地位 (situation) のあたへられる段階である。

もつともこの段階は第二段の困難ないし問題の定明の段階と一緒に溶けあうて出てくることもある。すなはち問題が感じられると同時にその問題の見定め、定明、ができてゐることもある。しかしたとへ一緒になつてゐてもとにかくそこにはまづ問題がある、困難がある、といふ要素がある、次にその困難、問題のなにであるかの見定められるといふ要素がある。

さて以上三つの例のうちの第一の例についてみる。その困難、混亂は、手もとにある諸事情と目的とのあひだにある、望まれた目的とそれに達する手段とのあひだにある。すなはち定めの時と所に於て定め約束をはたすことと、そのためてその時まで、にその所にゆく手段とのあひだに困難がある。あたへられた事情はつくりかへられな、い、時もあともどりはできない。だからそのときの問題は、遠くに與へられたもの、手もとにあたへられたものとの二つのあひだにはいつて、その二つをよく調和させる、必要中間のX項の発見がその問題である。

第二の場合の困難はまづその棒が何であらうかといふこととそこにある諸事情とのあひだにある。こゝでも前と同様にこの二つの項を一つにつなぎあはせるところのよき中間項を発見することが問題である。もつともこの問題の性質はそこにある困難の性質が充分に認められてからでない、と明瞭でない。それには第二段のはたらきが必要

である。

第三の場合では、自然の法則を知つてをる人が泡のをかした現象を見たところに困難が起る。そしてこの場合の問題は、その泡の一面おかしな變則の現象と自然法とのあひだに、その兩者の調和をもたらしべき中間項を發見するにある。

### (二) 困難ないし問題の定明、の段階

次ぎは、感じられた困難、不調和、混亂、の性質をあきらかにするために行はれる觀察等の段階である。もとより、これはすぐまへにいうたやうに第一の段階と一緒にすることがある。すなはち困惑が感じられるとともにその定明が行はれることは多い。しかし非常な希異、困惑、困難などはまづなにかしらぬ感情のさわぎとしてやつてくることがある。こんな場合にはたしてその困難、困惑、心のさわぎが何であるかをよく定明するために必要な觀察や考慮が行はねばならぬものである、さうすることに依つて問題の性質をはつきりさせねばならぬものである。もつとも二つの段階が一つにな

つてやつてきて、問題が感ぜられると同時にその問題の性質のあきらかであるやうな場合でも、そのときの思考をあたふかぎりよく行はせるためには、一足とびに第三の段階へゆかず、特に念いりにこの第二段の骨折りをとつて問題の性質を——もつとひろい言葉でいへば状態の性質を——充分に見とどけねばならない。この骨折りをぬくとぬかぬとは、概していへば、思考作用が氣まゝに行はれるか批判的に行はれるかの分れ目となる。たとへば病人に醫者を呼んだとする。そして病人は醫者にそのわらいところをつげる、また醫者の經驗ある者は、一見して、その病氣の何であることこの象徴を見てとる。そしてその病氣の何であるか、すぐ彼に暗示される。しかしこの暗示をばそのまゝすぐにうけいれて結論としそれに従うて薬をもることは、科學的判斷の途をまことにみじかく切りすることである。彼は脈をみ、打診を行ない、聽診器をとつてよくみるなど諸々の手段をもつて、きはめて綿密にその状態を觀察するが望ましいことである。これは醫師の場合ではいはゆる診察である。しかしかうしたダイ

アグノシスは醫師ばかりにでなしにすべての思想家にあるべきものである。新らしい混亂をもつた一つの状態として病人があたへられたならば思考者はそれをよくよく診察してから投薬すべきである。でないとなまたままちがひが起るであらう。批判的思考にはこの診察——困難ないし問題の見定め——がぜひ必要である。それは推理の結果をより正しくあらしめるものである。

### (三) 暗示、の段階

これは可能的解決案(ないし結論)の暗示的に提出される段階である。困難が感ぜられ問題があきらかになるとやがてその問題の解決案が暗示されるものである。時間、約束、場所。それらのことからさすがに地下線や高架線のことを思はれる。眼のまへの棒。それについて、旗竿？ 裝飾？ 無線の道具？ 等のが思はれる。石鹼の水の泡。それから、熱と氣體の膨張收縮の關係が暗示される。すなはちこの暗示の段階は結論への飛躍または結論への橋かけの段階である。そこで——

「a 暗示は推理の心髄である、それは現にそこにあるところのものからそこになり或物へ渡ることをふくんでをる。したがつてそれは多少投機的である、冒險的である、推理は實際そこにあるものを越えてゆくのであるから、それは飛躍をふくんでをる、その正否は、どんなにはじめに用心したところで、前以て絶對的に保證されえないものである」——「どう私らは考へる」七五頁。

「b、暗示された結論は、受けいれられたのではなくてほんの試見的にもてなされてゐるものである限りに於て、一つの考へ(觀念)を構成する。この觀念といふ言葉の同異語は假定、想像、推測、假説 (supposition, conjecture, guess, hypothesis) および(その充分に念のはいつた場合には)定説 (theory) などである。信念の見あはせ、すなはち後の證據を思ふての最後の結論の延期、は一部分は、とるべき最上の途はどれか、都合よさうな説はどれか、といふことについての反對の諸想像が現在するためであるから、種々澤山のとり換へられるべき諸暗示をつくつておくことが、よき思考の重

要な要素である。」——同上七五頁。

#### (四) 推理開展、の段階

(もつとも推理に *inference* と *reasoning* とをわけうる。インファレンスはあたへられた諸事實から觀念を導き出すことである。すなはち第三段までのところは、もつとせまくすれば第三段は、このインファレンスである、それは歸納推理的である。つらにリーズニングは、かくしてあたへられた觀念から外へ廣くひろがりゆく推理である。でそれはいはゞ演繹推理的である。もちろんインファレンスもリーズニングもそれを廣い意味にとればあらゆる推理の全體を示すのである。がふるい人たちがあたへられた一つの觀念から次々におしひろめてゆくところの辯證的な推理に、もつともよくリーズニングの言葉があたる。こゝではあたへられた一つの暗示としての觀念を開展させてゆくのであるから、特に推<sup>リーズニング</sup>理といふをこの意味に限つて用ひた。のであることをデューイも註釋してをる。)

さて一つの可能的解決案または結論としての觀念があたへられると、次にはこのもつ内的諸關係——内含する諸意味——を開展さしてゆく。たとへば高架線の觀念が暗示された。するとこの考は開展して停車場を見つける困難、行くあひだにかゝる時間のこと、向ふの停車場から行く場所までの遠さのこと、などの多くの考へになる。また第二の例の場合でいふと旗竿といふ觀念はやがて垂直に立つてゐねばならぬこと、また無線の道具といふ觀念はそれが船の高いところにあるべきだといふこと、曳船などにはなくともよさそうなこと、等を、開展させてをる。そしてこれらは結局よくないとしてすてられるが、その棒が船のゆく方向を指し示すものであらうといふ觀念は、開展すればするほど、よくすべての事實を説明することになつてをる。このやうに暗示された可能的解決案としての觀念は推理によつて開展させられる。

#### (五) 立證結論、の段階



推理の開展も都合よくいつたとなればその可能的結論としてうけいれられた観念はその確實さをましてをるわけである。「方向を示す棒」といふ観念は開展された、そしてそれが船を指導するにいろいろ都合よき事情におかれてゐることをみた。このみたといふところは第四の段階にまつたくとけこんではをるが、これをひきはなせばこれは第五の段階である。推理の結果を観察したところによつて、それは立證し、その結論をなしてをるのであるから。

また第二の例に於て地下線をとることになつた。それは「地下線」のうちにある諸意味諸關係を開展させてのことであつたが、はたして豫期通りの結果になるかどうかは、實際に行うてみたあとでなければわからない。實際に行うて成功した。そこでその可能的解決案はよき正しきものであつたことが立證されたわけである。

この段階をもつともよく説明するものは第三の例の場合である。たぶんコップの中はいつた冷たい氣體が、ふくれて外に出るとき、石鹼水の泡を吹いたのであらう、と

いふ観念が暗示され、それがまた種々に推理展開されて最後には（第五段）その開展の結果に従うて實驗を行うてみた。すなはち或るコップを熱湯からとり出すときには中に冷たい空氣のはいらぬやうに、あるコップのときははいるやうに、して實驗したところ、前者からは泡が吹かず後者からは吹いた。そこではじめの可能的解決案が正しいことを立證され、正しいものとして結論されてをる。

（六）思考作用は二つの觀察のあひだにくる

これは以上の五つの段階を見ればわかる。まづ第一段が觀察である。そして最後の段階も觀察（ないし實驗）である。そのはじめには問題をはつきり見定めて状態をあららかにするために行はれる。その終りに於ては假說的結論の價值をためす、立證する。この二つのあひだに私らはより多く精神的な思考作用（論理作用）を見る。（今日ではいはゆる論理なるものをこの如き意味から中介手段 [intermediate steps] であると見る人がある。）

そしてこの二つのあひだにはいるより精神的なはたらきといふは（一）インファレンスと（二）リーズニングとである。前者は可能的結論を事實を基礎にして立てるものであり、後者はその立てられた一つの暗示的觀念を開展させるものである。

また推理と事實とは相互にあひたすけあうてをる。推理は事實に依つて確實にされるし、また實驗が有効に經濟的に行はれるためには、推理によつて試見的に開展された結果にしたがふほかないのである。

（さてまへの數章にのべたところも同じく思考のはじめより終りにいたるまでのことである。それでそれとこの章「およびこれ以下の數章」の説明とは、同じものを中からと外からとみたやうなものである。思考の先件、狀位の與件と意味「觀念」への分化、思考の様式の妥當性の問題、等々は以上の具體的説明の表皮をはいだところにひそんでをるわけである。）

## 第九章 歸納と演繹（組織的推理）

—HOW WE THINK, CH. VII.

—Department Logic, Ch. IV.

思考全體のうちの特に論理的すなはち精神的—のはたらきはインファレンスとリーズニングであると前章にのべた。前者は歸納であり、後者は演繹である。この章に於てはこの二様の思考作用についてみる。

### 一、反省的思考の二重運動

#### （一）與件と意味との間の往復運動

「思考作用の特徴的結果は、そのまゝでは孤立した、斷片的な、不調和な諸事實または諸條件を組織すること、結合のはたらきをする鏈環、すなはち中間項、を導き入れ

て組織すること、であるのを私らは見た。その如く存在する諸事實は與件である、反省思考の生またの材料である。それらのあひだのほんとうの結合の缺乏が困惑を起し、刺戟して反省思考を起らせる。それについて、もし確められたらば、種々雑多な斷片的なそして一見して矛盾してをるごとく見える諸與件が、そこにその本來の位置を見出すであらうやうな一統體を、あたへるであらうやうな或る意味が、暗示される。この暗示された意味は心的プラットフォームを供給する、これは知的の眺望點であつて、人はこゝに立つて與件をもつと注意深く注意し定明し、その他の觀察すべき事柄を探し、また變化した諸事情を、實驗的に、こさへようとするところである。」——「どう私らは考へる」七九頁。

(このことはすでに第五章に於てのべたとほりである。もつとも第五章には、はなはだ抽象的に理性的にのべられてをるが、こゝにはかなり具體的に述べられてをる。そ

こで本章に説くところのよい理論的の基礎を望むにはその章をかへりみるべく、またその章のもつと具體な説明をのぞむにはこの章を參考すべきである。なほこれはこの章にかぎつてのことではなく四、五、六、七の諸章と八、九、十、等の諸章はあるひは全體的に、あるひは部分的に、相呼應することが多い。)

### (二) 歸納と演繹

與件(すなはち事實)から意味に、また意味から事實に、歸る二重運動はすべての思考に見られる。そして前者は歸納のはたらきであり後者は演繹のはたらきである。

このやうにすべての反省思考のうちには二重運動がある。——あたへられた部分的な混亂した與件から、暗示された、すべてをつゝむ的(すなはち内に包む的)、全状態にいたる運動。およびこの暗示された全體——(暗示されたものとしてのこれは意味である、觀念である)——から個々の諸事實への運動、……がある。」——「どう私らは考へ

る「七九頁」。

ところがこの歸納および演繹の二重運動、すなはち意味への運動と意味からの運動との二重運動、はきはめて無用心に、そこつに、行はれることもあるべく、またきはめて用心深く批判的に秩序的に行はれることもある。いつたい考へるといふことは、經驗の中にできた溝を埋めること、その道を講ぜぬばらばらに孤立してをるところの諸事實を結びあはせることを、意味する。ところがこの溝を私らはあはてしとび越えることもあり、また用意深くあたりを見まはして失敗のないやうに、かけたはしの缺點のないやうに、思慮ある橋かけをすることもある。すなはち、私らは何か私らを考へさせる状態にぶつつかつたをりに、ひよいと心に浮んだよさうな暗示をそのまゝ受け入れることもあるが、またその暗示に附随した諸要素や、新らしく見出される諸困難を狩り立て、そしてその暗示された結論が、これらの諸事實をもよく説明して、はたして完う事件をおさめるかを見ることもある。この後の方法は與件と意味との二

つのあひだ、經驗のうちに作られた溝の兩側のあひだ、にかけわたすべき結合物をはつきりと述べ立てる、原理—普遍—なるものをもつてくる。そしてその場の状態を一つの完全な統體に再形成する。そしてこの形成された統體の姿を見ると、はじめのばらばらであつた、いやときには矛盾してをつた、諸與件、諸事實、諸條件は、その形成された統體の基礎になつてをる、根柢になつてをる、すなはち論理的にいへば推理の前提となつてをる。その基礎、その根柢、の上にのせられた論理的信念はいはゆる結論である。それはたゞ事實的の終局ではなくて合理的の結論である。

この結論はいはゆる意味であり、前提は與件である。——（もつともすでに合理的な結論となつた意味は、たゞ暗示的であつたをりの意味よりは、進化してをるわけである。この進化した意味はもはやたゞの意味ではなくて、與件と意味とを包攝した意味である。それは思考の内容であり、目的物であり、産出物である。デューイが用ひる意味、觀念、の言葉は、その用ひられる範圍のはなはだ廣いことは、すでに前にも注

意した通りである。)——この前提と結論とのあひだを埋める諸中間項をよき思考は必ず見出さうとする。

さてこの後者——すなはちあはてずに用心深くする思考、すなはち前提と結論とのかけはしを作る思考——はかならずそのあひだに繼續關係をもつてをる。この繼續關係。すなはち孤立した諸項を一つのほんとうの結合をもつた全體に結び合せる諸結合關係——の重要であることは、前提と結論との關係をのべる次の言葉のうちにも充分あらはれてをる。

前提と結論とは次のやうな關係をもつてをる。

(一) 前提は根據、根柢、基礎などといはれ、そして結論の下敷となり、それを差しあげ、支へるといはれる。(二) 私らはまた前提から結論に降り、また今度は逆の方向に昇つてゆく、——それはちやうど川がその源から海へ下り、また海から蒸發して天に昇り、その源へ歸つてゆくごとくである。そこで結論はその前提から湧き出で、流

れ、引き出されるのである。(三) 結論 (conclusion) は——言葉自身の意味するやうに——前提のうちに述べられた種々の諸要素を一まとめに、錠をおろしてしまひ込むのである。閉ぢ込むのである、結ぶのである。私らは前提が結論をふくむ (contain) といひ、結論が前提をふくむといふ。これは諸要素が共に結ばれて完全な一つの「つむむ的」の統體をつくることを示してをる。

いま以上にのべたやうな組織的推理を一口にいへばそれは「はじめには非組織的でありまた非結合的であつた諸々の考慮間に相互依存の明確な關係を認知することである、そしてこの認知は新らしい諸事實や諸本質を發見したり挿し込んだりすることに依つて行はれるものである。」——「どう私らは考へる」八一頁。

この組織的な推理はすなはち科學的推理、(科學的歸納および科學的演繹)、である。しかしその本質は前の粗野な推理と同じことである。そこには事實から意味(すなはち假説)へ、假説から事實へ、の二重運動がある。そのことなる點はたゞ推理の

各段階に於てより多くの用意があるだけのことである。よささうな意味觀念をあはてしとりあげることをやめて科學はさうした暗示の意味、すなはち解説、の出てくるべき諸條件をばよく統御的にあつかうてをる。科學はすべての結論——すべての觀念、意味——を後には、た、ら、く、べ、き假説としてうけ入れてをる。この假説をつくる運動がいはゆる歸納的發見法即ち歸納法であり、その假説をさらに開展させて應用して證據立てる運動は演繹的證明法、即ち演繹法である。こゝにつかはれた言葉のやうにだいたいから見て、歸納法は發見であり、演繹法は證明ないし立證である。そしてよく用ひられる言葉でこの二つを説明しようなら、歸納は諸特殊者 (*particulars*) から一般者 (*universal*) への運動であり、演繹は逆に、一般者から特殊者への運動である、特殊者は事實である、一般者は觀念である。特殊者は與件である、一般者は意味である。前者はあたへられた斷片的な諸條件である、後者はそれからつくられた假説である。

（このやうに、すべての反省的思考は事實と意味との二重運動である、それは假説と事實の二重運動である。そしてこれは、いはゞ一種の循環運動——循環論法——である。いひかへれば歸納と演繹とは相互に扶けあふものであつて、ひとり前者が後者を支へるのではなく、ひとり後者が前者をさへるのでもない。理性論者たちが演繹をすべての推理の根柢であるとするのも、また經驗論者たちが歸納があつてはじめて演繹の大前提はつくられるものであり、演繹は眞理の發見に何の役にも立たぬとするのも何れも一部のみを見てのあやまりである。思考を求めるまことの道はこの二つの道のあひだの二重運動の道である。

（またこの事實から意味へ、意味から事實へ、の二重運動は、決して以上にデューイが説明したやうに一つの全體思考のはじめと終りとに半分づゝの役目をつとめるのではない。それはだいたいから見て大きくわければその如くである。しかし、この歸納の段階にも意味から事實への運動——すなはち演繹——はふくまれてゐるし、また

演繹の段階にも事實から意味への運動——すなはち歸納——はふくまれてゐるのである。さらにたゞしくいへば前章にあげた思考の五段階の何れの段階に於ても、この兩種の運動が共にありうるのである。それはしばらく前に、事實と意味との相對的關係——すなはち意味が事實になり事實が意味になりしてその兩者のあひだに絕對的の差別關係はないといふこと——からしても考へられることである。同様にして特殊から普遍にゆくと、今度はその普遍がさらに事實となつて他の普遍にゆくこともあり、また逆に事實がかへつて普遍としてとりあつかはれることがある、すなはちそのうちに多くの諸特殊を分析されることがある。歸納と演繹、事實と意味、特殊と普遍等は相對的關係をもつものである。）

### (三) 日常經驗を例にとつて

以上にのべたところをもつとはつきりさせるためにこゝに日常のありふれた經驗を

例にとつてみよう。(もつともこれは前章にひいた諸例について見てもおのづから明かなところではある。)

いまある人が家うちをるすにして歸つてみるといろんなものがむちやくちやに投げちらされて混亂してをる。ひとりでに、この混亂はぬすびとのしわざであらうと思ふ。けれどもぬすびとを彼はみたわけではない。彼らがきたといふことは觀察の事實ではない。それはほんの考へである、觀念である。また彼の心にはあのとかこのとかいふきまつたぬすびとが浮んだわけでもない。浮ぶのはその關係である、ぬすびとの意味である。——ある一般物的のものである。彼の室のありさまが知覺される、そしてそれは特殊である、定まつたものである——すなはちまさしくそのある如くある。ぬすびとは歸納的に推理される、そして一般物的の位置をもつ。すなはち室のありさまは事實である、たしかでありそして自らそれを語つてをる。ぬすびとのきたといふことは事實を説明するであらうところの一つの意味である。

これまでのところでは特殊の現在の諸事實によつて暗示されて歸納的の運動がなされてをる。さらにまたこれと同様な歸納の道に於て、彼の子供たちがいたづらをしてこんな品物をなげちらしたのではないかといふ考へがおこる。前に敵對するこの假説（すなはち説明の條件的原理）は、彼が獨斷的に最初の暗示をうけ入れることをさまたげる。判断は途中で支へられ、積極的の結論が延期されてをる。

とにかく歸納によつて二つの一般者——假説、意味、觀念、可能的結論——がつくられた。今度はこの二つの一般者（意味）が演繹される。その演繹の結果を基礎にしてさらに觀察、思想、推理等がなされる。——もしぬすびとがしたのならかれこの事が起つてゐるにちがひない、值うちのある品物はうせてゐるにちがひない。といふところでは彼は一般原理または關係からそれに伴ふ特殊の事柄にゆいてをる、また諸特殊者にゆいてはをる、けれどももとのところに歸つたわけではない、もととまつたぐ同じ特殊者にかへつてゆいたのではない。もしもととまつたくおなじところに歸る

のであつたら無駄なことである。その特殊者は新しい特殊者である、その諸特殊者、すなはち諸事實、がみつかるかみつからぬか、その一般原理を立證する。さて彼は值うちあるものを入れた箱に行く。なうなつたものがある、またそこにあるものもある。なうなつてをるものはあるひは自分でよそにしまひ失なうたのではないか。この彼れの實驗は決定的な立證にはならぬ。彼は食器棚の銀器を考へる——子供がそれをもつてゆきもすまいし自分でそれをしまひうしなうこともないはずだ。見る。無垢の銀器はみなうせてをる。ぬすびとの考へはつよめられた。窓や戸をしらべてみるといぢくられてゐることがわかる。信念は高まる。はじめのばらばらの諸事實は一つのほんとうの關係をもつ綱目にをりなされる。はじめ歸納的に暗示された觀念がもし正しかつたらばそこにあるべくしてまだ經驗されてないところのそれがしの附隨的諸特殊事實が假説的に、そのはじめの觀念から推理し出される。と、新しい觀察のはたらきが、理論的に推理し出された諸特殊者の現在することを、示す、するとこのはたらき



に依つてその假説は強められ、確められる。觀察された諸事實と條件的な觀念とのあひだのこの往復の運動は、混亂した諸事柄をもつ經驗の代りに一條のすぢみちのたつた經驗がつくられるまでは——でなくば、すべてが役に立たぬ仕事としてすてられてしまふまでは——、續けられるのである。

諸科學も同じ態度、同じはたらき、の例證になる、たゞこの兩方とも因果や正確さや完全さについてもつと高級の細工をする、だけである。

以上であよその概説を終つたわけである。以下に於ては意味の發見、開展、立證の工夫が科學的に行はれる様を見よう。

## 二、歸納運動の指導

この節ではどんなにして歸納運動が導かれるかをみる。

### (一) 間接統整 (Method of Indirect Regulation)

歸納運動の統制はすなはち暗示構成の統御である。すべて暗示は知られたものからいまだ知らぬものにゆくことを意味する、それは現在までに與へられたものを以て未來を見ようとする、すなはちそこにあるものからないものを知らうとする。従うて暗示構成の統御は充分完全に行はれることはできない。また、その統御——統整——は直接に行はれてはならない。もし直接に、といふのは何ら間接の考慮を加へずに直接に、暗示を構成しようとするれば、その暗示は非批判的になる、非科學的になる、あわてたものになる。いつたいある状態のある人にどんな暗示が起るかは、その人の天性、氣質、そのときの彼の興味の強く向く方向、むかしの環境、過去の經驗の一般進路、彼のもつ特殊の修養、近頃つゞいてあるひは特に強く彼の心を捉へた事柄等々に依り、また或る程度までは現前の諸事情の偶然の關係にもよるのである、かうした諸條件に直接に支配されては暗示は充分に科學的でありえない。そこでその人がそれまでの經驗や修養によつていそぎの判斷をおさへ、さらに疑の眼を見はつて、さらに

探り調べようとするなら、暗示構成の間接統整がなされるわけである。彼は暗示の湧き出づる源の諸事實を分析し、押しひろめ、校正すべきである。すなはち科學的の歸納法は、その下に於て觀察、記憶、および他人による立證のうけ容れ（すなはち新しい與件を供給するはたらき）等の、なされるべき諸事情を統整せねばならぬ。これはすなはち間接統整の方法である。

さて一方にはA B C Dの諸事實があたへられ、他方には個人的諸習慣があたへられてゐると、暗示はひとりで湧いてくるのであるが、いまもしA B C Dの諸事實が注意深く見られその結果A' B' R Sに解かれると、はじめの場合とはちがつた暗示があのづから湧くであらう。これはすなはち間接統整の方法である。實際の事柄としてみれば、諸事實を目錄し、そのそれぞれの特徴を精確にまた詳細に記述し、あひまいな微弱なものを擴大し、亂すほどに目立ちすぎ輝きすぎるものを人工的に縮小しなどすることが、すなはち間接統整の手段である。かうすることに依つて思考者はあたへられた諸事實を加工し、それに依つて暗示の構成——すなはち歸納運動——を間接に指導する。

いまこれを醫者の診断を例にして説明する。もし醫者が科學的の修養をもつてゐたら彼はちよつと見たことからあはて、診断することをせぬ。外に強くあらはれてゐる徴候からみるとチフスのやうである、としても彼は結論をいそがずに、まづ(一)そこに彼にあたへられてゐる諸事實(與件)の範圍を、おし廣め、それからそれらの諸事實をもつともつとこまかく見る。すなはち彼はそこに見えてゐることがらのほかに病人の感じや病氣の前の事柄やを病人に尋ねてみるはもとよりのこと、あるひは手であるひは器械で病人の自覺しない諸徴候をひろくあさりこまかく見る。たとへば體溫、呼吸、心臓のはたらきなどが様々の道においてよく調べられる。このやうにひろくこまかく吟味されたあとでなければその醫者は病氣を断定しないであらう。

## (二) 科學的歸納法

以上のやうな間接統整による歸納法——すなはち科學的歸納法——を一口に定義すれば次のやうである。

「科學的歸納法は、みじかくいへば、説明的概念および定説の構成を容易にする目的で、與件の觀察と集積とが、統整されるすべての過程である。」——「どう私らは考へる」八六頁。そこでは暗示ないし觀念を構成するに重要さと意義とのある確かな諸事實を選択する工夫がなされる。その選擇の工夫には次のやうな三つがふくまれてをる。(一)あやまりに導きさうな不適當なものを分析によつて取り除くこと。(二)諸場合を集めて比較することに依り重要なものを強調すること。(三)實驗的變化によつて與件を用意深く構成すること。以下この三つについてのべる。

(1)不適切な諸意味の取り除き。

普通に、觀察した事實と判斷推理の結果とを混同してはならぬ<sup>1)</sup>、といふ。しかしそれは相對的な意味であつて、この二つのあひだには——理屈から考へれば——絶對の

區別はない。私は私の兄を見た<sup>2)</sup>」といふ事實は觀察の事實であるといふふう思はれようが、しかし、兄といふ言葉はたゞの觀察以上のある關係をあらはしてゐるであらう。それはすでにくらかの判斷推理を経てをる事實である。「私は人を見た」といへばだぶん關係の色はうすくなり觀察の色がこくなつてをる。しかし「私は色ある物を見た」といふよりはそれでもまだ關係的である。またこの最後のものにしたところで全く感覺的のものではない。それはとにかくしかし實際上の忠告としては、觀察の事實と推理判斷の結果(すなはち意味)とを區別せよといふことはよい。たゞいまも見たとほりこれは言葉どほりの眞理ではなくて、相對的のものである。この言葉のまことの意味は、經驗上まちがひやすいことの知れてゐるやうな判斷推理を取り除けといふことである。もとよりあやまりやすい、まちがひやすい、うたがはしい事柄といふのも相對的ではある。普通の事情に於ては「私は兄を見た」といふことはまつたいたしかな(いはゆる觀察の)事實といつてよい。けれどもある場合にはさうはゆかな

い。色ある物を見たといふことまでがうたがはしいことがあらう。それはほんとうの物ではなくて私らの感覺のあやまりであることがあらう。そこでどんな事實——どんなに觀察的な事實——の場合でもこの心がけ——事實の意味をあやまらないといふ心がけ——は必要である。科學的思考家といふは自分があまり早計に事柄の意味を讀みとりすぎることを知つて自分の興味や習慣やそのときの先入觀念に對して警戒する人である。

1 はじめミルが明瞭に指摘した。それから多くの論理學者にもその如くいはれる。デューソンの「論理學初步課程」一九一八年版、第二十三章二三五頁參照。

2 この説明や言葉もミルにはじまりデューソンが引き、いままたデューイがそれを批評してゐるのである。デューソンの二三六頁參照。

これを一口にいへば主觀的の偏見を去つて事實(ないし意味)をありのままに、すなはち客觀的に、とるといふことである。このためには心のもち方ももちろん大切であるが、その外に種々の工夫がこらされもする。何々計 何々鏡 何々器 何々機と

かゝる種類の道具はもとよりこのたすけになるものである。私らはそのときの種々の事情に依つて一つの温度をあるひは高く見、あるひはひくく見る。それをおぎなふには寒暖計の類を用ふればよい。大きい容積をしてをる 軽く思はれ、それと同じ重さでも小さい容積だと重く思はれる。この偏見を去るには秤がある。

## (二) 蒐集と比較

次には多くの諸場合をよせあつめて比較して、そして重要なものを強調することが必要である。たとへばこゝに一車の麥があるとす。その麥のよしあしを見るのにとの俵からか一にぎりを取り出してみた。しかしはたしてこの一にぎりですべての判断をしてよいかまよふ。そこで他の俵からも、また殊によつたら一つ俵のちがつた諸部分からも、一にぎりづゝを取り出して、それらをみんな比較して、そしてそれがそらうてゐたらそれでよい。しかしちがつてゐるときにはなるべく多くの諸場合をつくつてそれをまぜあはせたものが全體の評價の標準になるやうにせねばならぬ。このやうに

なるべく多くの諸場合を代表的にあつめてそれを比較するといふことは歸納法においてはまことに重要な部分である。

重要な部分ではあるがしかしこれは決して歸納法の全體ではない。歸納法はこの如く似たやうな諸場合の蒐集比較でつきてゐるごとく思はれがちである。けれども似たやうな諸場合を集めるほかに似てゐぬ點も十分に注意してみねばならぬ。異なつたものの對照をふくまぬたゞの比較は充分に論理的でありえない。同じやうな諸場合ばかりをいくらあつめてもそれが同じものであるかぎりは、はじめのたゞ一つの場合から推理したのとちつともちがつてない。たとへば前の麥の例に見るに、いく握りかとり出した見本はなにかの差異をもつてゐる。それはすくなくともその見本の一にぎりを取り出される俵がちがふ、部分がちがふ。この差異がなければやくにたゞぬ。要するに觀察者は事情の許すかぎり極端の諸場合を觀察してそこに差異を見出し、そして似た諸點と同様にこの差異の諸點を充分に認めるのでなければあたへられた與件のもつ

證據の力を充分に定めることはできない。

いま一つこれに必要なことは例外や反對の例を重んずることである。いはゆる否定的ないし消極的の諸場合に注意することである。ダーウインは、好都合な概括をするのに反對する諸場合はどうも見落されがちなので、單に反對の諸場合を狩り立てるだけでなしに、氣のついたまたは考へついた例外はどんなのもみな書き留める習慣をつくつた——でないとおほかたきつとそれは忘れられるものだから。といつてをる。

### 三) 諸條件の實驗的變化

次にはあたへられたまゝの生まの與件に種々實驗的に加工してその結果を基礎として結論にすゝむことが——できぬ場合は別としてできる限りはいつでも——きはめて必要である。理論的にいへば正しいたゞ一つの場合があれば充分であつて、それが千個あるも實は同じことである。けれどもその正しい場合といふのがひとりで飛び出してくることは稀である。私らはそれをさがさねばならぬ、つくらねばならぬ。もし

私らが私らの見出すまゝの諸場合をとりあげると——一つの場合であらうと澤山の場  
合であらうとにかゝはらず——手中の問題に不適當な用のないものをたくさんふくん  
でをり、そして適切な必要のものはあきらかに見えなくかくされてをる。實驗の目的  
は、あらかじめ考へ出された計劃を基礎としてなされる規則正しい段階をふんで、典  
型的な、はつきりと眞偽の分目を見せる場合を構成することである、そしてその場合  
といふのはとりもなほさず當の困難に光をあたへることを特に考へて作られた場合で  
ある。——「どう私らは考へる」九二頁。歸納法はいづれもみな觀察と記憶の諸條件の統整で  
ある。そして實驗はつまりこの統整の最も完全なるものである。

さてかうした實驗におよそ三つの利得がある。私らが普通に諸事實が起つてくるま  
ゝにみたのではそれが(一)あまりに稀れであることがあり、また(二)あまり微妙  
でこまかくて(あるひは亂暴で)あつて觀察のできがたいことがあり、また(三)あ  
まり頑固に固定してゐて困ることもある。ところがかうした觀察の缺點をば實驗は補

ふことができるのである。

デューイはデューヴォンズ (W. S. Jevons) の言葉をひいてこの三つを説明してをる。

——「どう私らは考へる」九一頁以下。デューヴォンズの *Elementary Lessons in Logic*, 1918, pp. 232, 233. 以  
下参照。

(2) 「何年も何世紀もまたねば偶然に出あふことのないやうな諸事實でも、研究室の  
中では私らはいつでもすぐに造り出すことができる。そしてまた今日知られてゐる化  
學的物質の大部分やまた多くの非常に有用な諸産出物は、自然がそれらを私らの觀察  
にまで呈出してくれるのをまつてゐたのでは決して發見されなかつたであらうと思は  
れる。」

(3) 「電氣はうたがひもなく物質のどの微量の中にもはたらいてをる、おそらくはど  
の瞬間にもはたらいてゐよう。ところが古代人さへも磁石の中、電光のうち、北極の  
アウローラのうち、あるひは摩擦された琥珀のうちに、そのはたらきを認めないでは

をれなかつたのである。しかしながら、電光に於ては電氣はあまりにつよすぎて危険であつた。またほかの諸例に於てはあまり弱くてほんとうに了解されなかつた。電氣および磁氣の科學は、普通の電氣器械や電池から電氣が規則的に供給されることに依つて、また強い電磁氣を起すことに依つて、のみ進歩することができたのである。電氣のなす諸結果は、たとへすべてなくとも大部分は、自然界に行はれてゐるにちがひない、けれどみんなあまりに不分明で觀察されがたいのである。』

(iii) 『かく炭酸はガスの形でのみ發見される、そしてそれは炭素の燃焼から生ずるのである。けれども極端に強い壓力を加へまた溫度を下げると炭酸ガスは液體になり、またさらに雪のやうな固體に變へることもできる。他の多くのガスも同様にして液體化され、あるひは固體化される、そしてあらゆる物質は固體、液體、氣體の三つの形を、もし溫度と壓力との諸條件が充分に變へられさへすれば、もちうるといふことを信じてよい理由がありさうである。自然の單なる觀察は私らにこれとは反對に、ほと

んどすべての物質はたゞ一つの狀態に固定してゐて、そして固體から液體に、液體から氣體に變へられることはできぬものと思はせたことであらう。』

歸納法の工夫はいろいろあらうが、「それら歸納法の種々の工夫はみな共通の一つの目的をもつてをる——それは暗示のはたらし、すなはち觀念構成、の間接統整である。

そして、だいたいに於て、それらはいま上にのべたところの、題材の選擇と按配の三つの型のある組み合せとして見出されるであらう。——「どう私らは考へる」九三頁。

### 三、演繹運動の指導

#### (一) 演繹は歸納の指導をする

(推理活動を全體としてみるときにははじめが歸納の運動であつて後が演繹のそれである。けれどもこれはだいたいのことであつて、歸納にも演繹が、演繹にも歸納が、いり亂れてはたらいてをることはまへにもちよつと述べた通りである。)

さて演繹運動の指導についてのべるまへにまづはじめの歸納運動がそのはじめに於て演繹に依つて統御されてゐることを見よう。「歸納法を組織的に統整するには、特殊諸場合の出てくるにつれて演繹的にそれらに適用されうべき一團の一般諸原理をもつてゐることを要する」——「どう私らは考へる」九三頁。たとへば醫者が人體の生理學の一般諸法則を知らなかつたら、彼れの招かれたの場合に於ても何が特に意義をもつのか、異常なのか、をほとんど判斷することができない。しかしもし彼れが循環、消化、呼吸などの法則を知つてゐたら、そのあたへられた場合に正常に見出さるべき諸事情を演繹し出すことができる。この演繹の結果を基礎にして彼はその場合の異常を測ることがができる。かうすることに依つて現前の問題の性質が見定められ定明される。そしていかにも顯著ではあるがしかしその場合に實は何の關係もないやうな事柄について餘分の注意をひだづかひするやうなことがなくてすみ、そして説明吟味を必要とする

部分にだけ注意が集注する。いつたいよくなされた疑問は半ば答へられてをるものである。すなはち明瞭に領得された困難はひとりでその解決を出さうとする。——ところが問題があひまいに雜多に知覺されたのであつては、その解決はめくらの手さぐりのやうにして、求められる。演繹の出きるやうな體系的知識をもつてをることは問題をよく實<sup>みの</sup>るやうな形に作るためになくてならぬものである。

(二) 演繹

歸納は演繹の力をかりて問題を見定める。しかし演繹の本來の仕事はそれだけではない。さうして問題が見定められ、そこに暗示的の觀念が出てきたとき、演繹はこの觀念をおし廣めてはたしてそれが正しいかを見る。觀念は、そのはじめて出てきたときには不確かな不充分なものである。演繹はこのふたしかな觀念に加工して充分な完全な意味に作りあげるはたらきである。いま醫者がそれがしの諸事實からしてそれはチフスであらうと思ふ。さて私らはこのチフスといふ暗示された概念を開展すること



ができる。もしそれがチフスであるなら、チフスに就いての一般の原理に従うて、これこれの徴候がなければならぬ。といふやうにそれは開展する。そして彼はこの開展の結果を道具にしてまきに見出さるべき他の諸事實をさがす。彼はさらに進んで観察や實驗を行ふ。そしてその観察實驗の結果と、はじめたゞ理論的に演繹し出された結果とが一致するかを調べる。もしこの場合に一般原理の體系がなくて演繹の行はれえないであらうならば、假説の立證ないし證明は不完全なでたらめなものになる。

(三) 演繹の指導者

それではかうした演繹の指導統御統整はなにに依つて行はれるか。といふにそれは組織立てられた知識、定義や分類、に依るものである。がその最後の統御者ないし立證者つまりは観察ないし實驗である。

以上のべたところを見てもあきらかなやうに演繹運動は一般原理ないし法則なるものによつて導かれてをる。その原理法則といふのはいふまでもなく組織立てられた

知識である。そしてかうした知識はいはゆる定義ないし分類の形で保存される。もとよりそれはたゞ保存されるのではない。それはあたへられた觀念を開展してあたへられた事實にあふことを證するための道具である。

そこで演繹の最後のテストは實驗觀察である。

「演繹の最後のテストは實驗的觀察のうちにある。推理リズニングに依る推敲は暗示された觀念をまことに豊かにしいかにもつともらしくはするが、しかしそれは觀念の妥當性を決定しないであらう。演繹された諸結果と詳細に一致して例外をもたぬところの諸事實が、蒐集あるひは實驗の方法に依つて、見とられたときにのみ、私らはその演繹を妥當な結論をあたへるものとして受け容れることができる。思考作用は、短かくいへば、具體の觀察の境からはじまると同様にまたそこに終らぬばならぬ、もしそれが完全な思考であるべきであるならば。」——「どう私らは考へる」九六頁。

## 第十章 判 斷 (事實の解釋)

— HOW WE THINK, Ch. VII.

— Experimental Logic, Ch. IV.

普通論理學では推理は判断の集合であるといふ。前章に於ては推理をみた、この章に於てはその推理の一要素である判断をみる。たゞしこゝにいふ判断は形式論理學でいふ命題と一體であるところの判断よりははるかに広い意味である。私らが日常の言葉で判断するといふときの意味の判断でそれはある。だから、判断そのものがすでに推理をもつてをる。前章には組織的の推理をみたのであり、その推理は歸納と演繹とであるがこの章の判断はさうした推理の小さい一かけらとも見られてよからう。こゝに一つの地位がある。その地位の問題を解決するために諸々の判断がなされる。

それら諸々の判断の後にその地位の問題をまろくおさめる最後の判断をつくり出すのが推理の目的である。そして判断はその局所局所の事柄を判断するのである。判断もまた小さい推理である。

## 一、判断の二要素

## (一) 判断と推理

「判断と推理とのあひだに新しい関係のあることは充分あきらかである。推理の目的は地位の充全な判断に於て自らを終末させることであり、そしてまた推理の流れは部分的な試見的な諸判断を通じて進む。」——「どう私らは考へる」一〇一頁。

判断と推理の関係はこの言葉の中によくあらはれてゐるであらう。判断はいはば推理の諸單位である、あるひはその諸項である。

しかしこれら諸單位あるひは諸項は全く推理の材料となつてしまふのではなくてそ

れ自らでもまたはたらくものであることを忘れてはならない。いまかうした諸判断を推理のうちの要素、單位、と見ずにそれ自らとしてみたらばそれは何であらう、その諸特性は何であらう。デューイは裁判官の判断を例にひいてその諸特性を數へあげてをる。といふのも判断の英語の *judgment* は裁判官の英語の *judge* と親類の言葉であり、椅子に腰かけた裁判官のチャッヂのチャッヂ（裁判、判断）すること、あるひはした結果、がチャッヂメントであるからである。それはとにかく椅子に腰かけたチャッヂのチャッヂメント（判断、判決）にはおよそ次のやうな三つの要素または局面があらう。（一）同じ客觀的状態についての反対した諸主張からなる論争、（二）その諸主張の定明と推敲、およびその主張を支へるために引き出された諸事實の精査、の過程、（三）論じられてゐるその特個の問題を解決し、また將來の諸場合を決定すべき法則または原理として役立つところの、最後の斷定。

### (二) 判断の三要素

さて右にのべた三つのことはそのまゝ一般の判断の三要素として通用する。以下その三つについてかんたんにのべる。

#### A—不確實が判断の先件

何か疑はしい問題があるときは裁判が起るやうに判断もなにか疑はしいことのある場合に起る。

「なにか疑はしいものがあるのでなければ状態は一目見たばかりで讀み去られる。それは見てすぐとりいれられる、すなはちそこにはたゞ領得が、知覺が、認知があるのみであつて判断はない。またその事柄が全く疑問であるならば、それがすみからすみまでくらやみで、不分明であるならば、そこには盲目の神秘があつてまた判断は起らない。しかしたとへかすかにでも、それが異なつた諸意味、すなはち反対しあふ可能な説明を暗示するならば、そこには何か問題の點 (some point at issue) がある、何か大事な問味 (some matter at stake) がある。……『それは何か。塵の渦巻く雲

か？、その枝がゆれうごく樹か？、私らに何か合圖してをる人間か？、……これらこもごもの暗示された諸意味のどれが正しい主張をもつか。その知覺はまこと何を意味するか。それはどう解釋さるべきか、評價さるべきか、はからるべきか、位置づけらるべきか。どの判断もみな或るかうしたやうな、状態から出てくる。」——「どう私らは考へる」一〇二頁。

(こゝにあきらかであるやうに、デューイのいはゆる判断はその言葉の示す意味通りの判断であつて、それはそれ自身ですでに小さい推理である。それは大きい一體の推理の中の小さい一項としての推理である。そこで先件がいたり、状態がいるわけである。これはしかし形式論理學のいはゆる判断とは、まへにものべたやうに、大いにちがう。形式論理のそれはたゞ推理ないしは知覺等の結果としての表現であるにすぎない。それは「雨がふる」といふ形にあらはれただけのものであつて、その「雨がふる」に

至るまでの心のはたらきはみな見すてられてをる。そこでデューイの判断についての所説を了解するにはこの形式論理からの先入見をまづとり去る必要がある。これは以下のところでも同様である。)

#### B—判断は問題を定明する

裁判のをりに雙方の主張をよく調べ、またその諸事實を精査するやうに、一般の判断に於ても一方では與件を吟味し、一方では暗示された意味を推敲する。すなはち二つの派が出さる。

「法律的論争の考慮に於ては、これら二つの派は證據の精査と適用すべき法律の選擇とである。それはその場合の『事實』と『法律』とである。判断に於てはそれは(a)與へられた場合<sup>ケース</sup>に於て重要な與件の決定(歸納運動に比較せよ)と、(b)生<sup>タ</sup>まの與件から暗示された概念ないし意味の推敲(歸納運動に比較せよ)とである。」——「どう私らは

考へる」一〇三頁。

この二つはまつたく相互によりあふものであるが便宜上こゝにわけて考へよう。

(a) 實際にあたへられた状態のうちにはたくさん諸事柄がある。しかしそれらがみな當の問題に用があるのではない。そこでそれらの中からまづ當の問題に對して意義あるものを選択する必要がある。もつとも表面にはつきりあらはれてゐないものでもその問題にとつてまつたく重要な意義をもつものもあるから、その點にも充分に注意せねばならぬ。かくして當の問題に意義があると思はれる諸事實をあつめてそれを事件として判断するわけであるが、もしその事件が當の問題を解決する材料にならないときには、それをすてゝまたあらたに證據の選擇をやり直す。

もつともその選擇するにあつて別にはつきりした法則などがあるわけではない。それをうまくやるかやらぬかはたゞその判断者の個人的な腕まへ次第である。さうしたちから普通の事柄についてのをりには、英語では *knack, tact, cleverness* などといひ、

もすこし重い事柄の場合には *insight, discernment* などといふ。一々それにあたる日本語を生きた姿でさがすことはむづかしいが、呼吸をえてをるとか、こつをつかんでをるとか、眼がきくとか、えらい、かしこいなどの言葉がぼんやりそれをしめすであらう。「それ(選擇の力)はなれば本能的でありまたうまれつきである。がまたそれは過去に於ける同様のはたらきに長く馴れてきたための基礎ある産物でもある。證據となりまた意義あるものを選んでその他のものをすて去るこの能力をもつてゐることが、どんな事柄に於てでも、<sup>エキスパート</sup>老練家、<sup>コンシサー</sup>鑒識家、<sup>ジャッジ</sup>チャッヂ(判断者、判決者)のしるしである。」  
——「どう私らは考へる」一〇四頁。

この能力が極端に微妙になるとそれはいはゆる直覺的の判断となつてくる。實際日常の事に於てもまた科學のことに於てもこの直覺的の判断はかなり有効にはたらくものである。數學問題の解決などもかなり直覺的に行はれることは事實である。

(b) さて次には暗示された諸意味—諸法則の選擇をせねばならぬ。いま選ばれた諸

事實なるものがその解決案としての意味、概念、法則、道を暗示するのであるが、この暗示された概念は、法則は、道は、意味は、その諸事實をりつばに説明してのけねばならぬ。そこで、このはたらきは前のはたらきと同時的起るわけである。暗示された諸法則諸意味は一つでなくて多くある。その一つ一つのうちでどれがよいかを判断せねばならぬ。もちろんそれらの諸意味には「私を用ひなさい」などのほり札はないから、選擇は判断者の手でなされねばならず、従つてそこに危険があり、判断者の責任がある。そしてそのどれが選ばれるかといふことはつまりはその何れが最もよくその不明の部分を明るく照らすか、かたい結び目をとくか、不和を調和させるか、といふことであり、そしてその如くよくはたらく概念、意味、がその状態に妥當なものなのである。

#### C—判断は斷定に終る

裁判の終が判決であるやうにすべての判断の終りは一つの斷定である。判決はまた今度の諸場合を決定する道具に用ひられるやうにすべての判断の結果もその後の判断

思考に用ひられる。判決例が重なりとその權威がついてくるやうに、判断も度々くりかへされてくればその結果は自然に論理的の概念となつてその確實さをますわけである。

## 二、觀念の起源と性質

### (一) 觀念と判断—觀念の起源

「これは、判断に對す關係に於ての觀念の問題を私らにもつてくる。不分明な状態に於ける或る者が何か他の或る物をその意味として暗示する。もしこの意味がたゞちにうけ容れられたならば、そこに反省的思考作用はない、何ら純粹な判断はない。……けれども暗示された意味が未決の状態で保たれて、試験や探究にひつ懸かつてゐるならば、そこにはほんとうの判断がある。……たゞ條件的にうけいれられてゐる、すなはちほんの試験のためにうけいれられてをるこの過程の中に於て、意味は觀念に

なる。すなはち觀念は、困亂してゐる状態を定めるに適當であるものとして試見的に採用され、形成され、また使用された意味である、——判断の道具として用ひられた意味である。——「どう私らは考へる」一〇八頁。

(こゝに私らの注意せねばならぬことは、デューイのいはゆる「觀念」<sup>アイディア</sup>は第六章の「興件と意味」のうちにもべたとく、それは斷えず生長しつつある一位相であつて、形式論理學でいふやうな固定した一個の觀念——ないし概念——ではない。といふことである。形式論理學でいふ概念——こゝでいふ觀念にあたるもの——もやはり一つの判断の中の要素である。こゝの觀念もやはり判断の要素ではある。けれどもその兩者はまつたく異なつたものであることは右の文章であきらかなとほりである。形式論理の概念は判断の中の二つの形式的要素である。AはBである。といふときのAとBがそこでは共に概念——すなはち名辭——である。けれども

こゝではだいいちすで見えてきたやうに判断なるものが決してAはBであるなどのやうな形式的のものではない、いひかへればこゝにいふ判断はすなはち命題ではない。さうした判断ないし命題は一つの形式であるが、こゝにいふ判断は一つのはたらきである。そのはたらきとしての判断に於て試見的に採用された意味——(それは決して一個の名辭に相當するものでない)——がすなはち觀念なのである。それは判断の要素ではある。けれども形式的判断の形式的要素ではない。)

## (二) 觀念の性質

觀念の起原と生成とがあきらかなればその性質はちのづから明かである。すなはちいまもみたやうに、觀念は試見的にうけいれられた意味である。またそれを別にいひかへれば、觀念は判断のうちに用ひられた臆説である。

しかしその意味、その臆説、はまへに述べたやうに「判断の道具として用ひられた」

ものである。(こゝに觀念の道具インスツルメンタリテイ性が説かれる。インスツルメンタリズムの名の故はこゝにある。)まへにあげた所に歸つてゆく。何か不明のものが遠くで動いてをる。それば何を意味するものであらうか。人が人と呼んでゐるのか、塵の雲か、枝のゆれる樹か。これらは可能的な諸暗示である。この中のどれか一つを直ちにとりあげることは判断を束縛することである。ところがいま私らがその一つの暗示されたものを暗示として、假定として、可能なるものとして、採用するときには、それは一つの觀念となるのである。かうした觀念にはおよそ次のやうな性質があらう。(a)單なる暗示としてはそれは臆測である推測である、もしもすこし尊嚴な位置にある場合にはそれはハイポセツス假説シイオリまたは定説といはれる。すなはち、それは可能であるがしかしいまだ疑はしい様の解インタプリチエイヨン釋である。(b)たとへ疑はしくはあつても、それはなすべき役目をもつてをる、すなはち探究吟味を指導する役目をもつてをる。いつたい、まつたく疑はしいとされた觀念は探究をしびれさせてしまふ。またまつ

たくたしかとされた觀念は研究を束縛してしまふ。うたがはしいが可能性をもつものとしてとされたときにその觀念は研究の立場となり、プラットフォームとなり、方法となるのである。

觀念はすべて道具としてはたらかねばならない。はたらかずに、たゞ心の中の一状態としてとゞまつてをる觀念は——さうした觀念にも普通に觀念といふ言葉があてがはれはするが——ほんとうの觀念ではない。それはいつはりの、みせかけの、觀念である。偽觀念である。はたらくといふことはあたへられた諸事實の説明をする道具となることである。たゞ私らの心象としてどれだけあきらかに姿をとめてゐる觀念でもはたらかぬものはまことの觀念ではない。そこで心象があつても觀念のないことがある。また心象はどんなに不分明であつてもそこに觀念はありうる。もつとも強い心象と觀念と共にありうることはもとよりのことである。

以上のやうな觀念を道具としてつかへばめくらめつばうの探求をさけて効果をあげ



ることができる。

またかうした観念を用ひる探求は間接の探求である。(第九章二三四頁参照。) いったいに観念といふ方便物を使ふことをしらぬおろか者のはたらきは直接的であるが、ちえある者のはたらきはたまたま間接的である。それは實際の行に於てもさうである。が、またちえある行をあらはす言葉もぐるぐるまはつてゆくやうな間接の意味をもつ。とデューイはいうてをる。

### 三、分析と綜合

また判断のうちにはまたおのづから分析と綜合とがはたらいてをる。しかしこの分析と綜合の意味も普通にいはるゝそれらとは多少異なつたものである。

判断によつて困亂した興件は明らかに開かれ、そして一見したところ無關係の如く見えてゐた諸事實が一つに結ばれてくる。このはじめの興件の必要な諸點を明らかに

開くこと、はつきりさせること、がすなはち分析であり、その次のそれら諸興件の混亂を納めて一つの結論に結ぶことは綜合である。

よく心的ないし論理的の分析は物理的の區分とはちがふといはれる。それでもその知的分析はたまたま物理的區別にまねて行はれてをる。すなはち知的分析もやはり一全體をばそれを構成するすべての諸要素に分析するものと見られてをる。たゞ兩者の差異は物理的分析は空間的に行はれるが知的分析は心のうちに行はれるといふだけのことになつてをる。そこでさうした知的分析は私らの思ひめぐらせる限りの諸性質や諸關係を數へ擧げて目録につくることであると思はれてをる。けれどもこれはあきらかに物理的區分をまねたあやまりである。まことの知的分析は、一つの状態の困難を解決するために必要な意義ある特殊の諸性質を特にあきらかにして高調すること、である。それはその一全體の、よきもあしきも役に立つも立たぬも、ありとあらゆる構成諸要素の枚擧ではない。

次に綜合は諸事實の意義または關係をあきらかにするはたらしきである。といふものばらばらのやうに見えた諸事實もその關係や意義を明かにされれば自ら一つに綜合されるからである。こゝでも綜合はあらゆる構成諸要素を一體に積み重ねることではない。分析が積まれた積木細工の一體をその諸部分の積木にこわすことでないやうに、綜合はそのすべての積木を一體の細工に組み立てることではない。實際、綜合は、諸事實が結論に對する、あるひは原理が諸事實に對する、關係を握り込むときに起るのである。分析は強調であるやうに、綜合は位置づけである。すなはち分析は強調された事實または性質を意義あるものとしてはつきりつつ立たせる。そして綜合は選り出されたものにその脈絡コンテクスト（すなはち位置）をあたへる、すなはちその意味されたものとの關係をあたへる。すべての判断は、識別區別をふくむかぎり、ささいなことを重要なことから、不適切なものを結論に向くものから、分界づけることをふくむかぎり、分析的である。また、選り出された諸事實の位置さるべき包括的状態に心を残しおく限りに

於て、すべての判断は綜合的である。——「どう私らは考へる」一一四頁。

こんなわけであるから分析と綜合とは相關的である。「分析は綜合に導き、また綜合は分析を完全する……そこで分析と綜合とを互ひに反對させようとするのはおろかなことである。」——「どう私らは考へる」一一五頁。

## 第十一章 意味(すなはち概念と了解)

— HOW WE THINK. Ch. IV.  
— Experimental Logic, Chs. III-V.

この章にのべることは別にあたらしいことではなく、これまでの諸章に述べられたところの中心問題に歸つて、それをいませし徹底させることであるにすぎない。その中心問題は、すでに明かであらうやうに、意味である。すべての思考は意味を求めようとして起り、その意味をえて満足するものであるから。

### 一、心的生活に於ける意味の位置

この節のことは、意味と了解の同等性と了解の直接間接の二つの型と、である。

#### (一) 意味と了解 (Meaning and Understanding)

意味をつかむことはすなはち了解することである

いま誰かやつてきて *Paper* というたとする。そのときもし私らがこの英語をしらないならそれはたゞそれだけの音であるにすぎない。またその音が私らに生理的な刺戟をあたへるかあたへぬかもわからない。かりにあたへてもそれはそのやうな刺戟であるだけであつて知的の對象、知的の價値ではない。それを了解しない——いひかへればその意味を知らない。すなはち了解しないことは意味をもたないことである。それを逆にいへば了解することは意味をもつことである。短かくいへば了解と意味とは等しいものである。いま *Paper* という聲をきいてそして私らが英語をしつてゐたら私らはそのことばを了解する、そしてその言葉の意味を知る。こゝには了解が、同時に意味が、ある。しかしそのことばとしての意味は了解されてもこの場合にそれが何の意味するかは了解されない場合がある。ペイパーといふ聲は新聞をもつてきたといふのか、何か他の書き付けでももつてきたのか。實はいま重要な文書の受けとり書を待

つてゐたをりだとすれば私はそれをすぐそのうけとり書だなど了解するであらう。このやうに了解するといふことは意味をつかむといふことである。

次に知識と意味との關係をみる。

表面に奇妙な跡のかきつけられた石が発見されたとする。何かの文字か、それとも繪の、ほりつけられたものか。それ以外のものか。かうした疑問の起るかぎりそこには意味が求められてをる。それは了解されてゐない。けれどもその色とか形とかその他のことはその物の石であること等を意味してをる。このやうに思考は、了解されたものと了解されないものとの特殊な混合、すなはち意味といまだ意味ないものとの特殊の混合、から呼び起されるものである。さて研究の結果その跡は氷河のすべるときにかきつけられたものであるときまつたとしよう。するとこのときの了解ないし意味に役立つたものは氷河の流れるときに起る現象についての既得の知識である。すなはち「一つの狀位に於てすでに了解されてゐた或るものが、他の一つの狀位の中の不思議な困つた事柄に移されて適用され、それに依つて後者はあきらかに知れてをる。すなはち了解されてをる。この摘要的な説明は。有効に思考する私らの力は、望まれるに従うて適用されうるであらうところの意味の資本をもつてをることに依存する。といふことを明かにする。」——「どう私は考へる」一一八頁。

### (二) 直接了解と間接了解

ペイバアといふ言葉の意味を言葉的に知ることが直接の了解である。しかし人が自分の室にきてペイバアというたこと全體の意味を知ることが間接了解である。それを石と知ることが前者であり、その石の表面の奇妙な跡の意味を知ることが後者である。そこで直接了解はそのものと意味とがはなれてゐないで、ものをみればすぐ意味の知れるやうな了解であり、間接了解はそのものと意味とが、すくなくとも一時的に、はなれてゐて、ものをみてすぐにその意味を知ることができずにまわりみちをしてゆかねばならぬやうな了解である。

このやうな直接間接の知るはたらき(了解、了解といふ字はこゝに適當ではないが)に對して、たいていの言語のうちに二種の言葉がある。次にあげる諸言語の言葉のうち前のは直接に知るはたらき(直接了解)の言葉で、後のは間接了解の言葉である。まづギリシヤ語には *gnōvau* と *eidēnai* があり、ラティン語には *noscere* と *scire* とがあり、(はじめの *noscere* は直観してしる意、*cognize* の *gnize* はそれからきてる。 *scire* は *science* の字の中にはいつてをる。)ドイツ語には *kennen* と *wissen* があり、フランス語には *connaître* と *savoir* があり、英語には *to be acquainted with* と *to know of or about* とがある。もつとも英語のはこの一對よりは *to know him* の *know* と *to know that he has gone home* の *know that* との一對の方がよくあたるともいふ。(「どう私は考へる」二一九頁。)(さて日本語にはどんなのがあらうか、しるとわかるはどうかであらう。)

さてこの直接間接の二つのはたらきはあらゆる反省的思考に於て相互に交渉する。直接の了解は既得の知識を意味する。私らは直接に知つてをるだけでは反省的思考を

起さない。なにかその知つてゐるもののおひだに知らないものを見出したとき、いひかへれば意味の缺乏を感じたとき、反省思考するものである。これをさかさにいへば、私らは私らのもたぬ意味を捕へようとして思考するのであるが、しかしそのためにはすでに何かの知識(意味)を手に道具としてもつてゐねばならないのである。かうして意味の缺乏は新しい意味をえようとすると同時に、私らにえられてゐる意味がまた問題をつくるのである。科學を知らぬ人たちならば何の問題をもたぬところに、科學を知る人たちは多くの問題を見る。

そこで私らの「純粹な知識の進歩はいつも、なかばは、前には、ひらたくあきらかなもちろんのこととして許されてゐたものの中に何か了解されないものを發見することに於て、またなかばは、疑ひないものとして直接に捕へられてゐる諸意味をば不分明なうたがはしい困らせる諸意味を捕へるための道具として使用することに於て、行はれる。……私らの知的進歩は、すでに述べられたやうに直接了解——學術的

にさへば *apprehension* と間接の、中介的の、了解——學術的にさへば *comprehension* ——との施律のうちに行はれる。」「どう私らは考へる」一二〇頁<sup>1</sup>。

1. *apprehendo* = *ad* (to) + *prehendo* (I take or seize) *comprehendo* = *com* (con, together) + *prehendo* (I seize or grasp).

## 二、意味を捕へる過程

意味の直接了解はどうして行はれるか、意味はどうして熟知されるか。それがこの節の問題である。すなはち直接了解されうべき諸意味の貯へはどうしてつくられるかである。

### (一) 混乱から熟知に

見ると、きくと、ふれると同時に物事の意味が直接に了解されるやうにはどうしてなるか。椅子やテーブルや、本や木や、星や雲や風や、を私らは見ると、あるひは感

じると、すぐに私らはそれを星と知り風と知りそれぞれと知る。そしてこんな場合にはそれらの事物とそれらの意味とがほとんど一體になつてしまつてゐて、かつて私らがその事物と意味のあひだに了解のはたらきをする必要のあつたことを全く見おとすほどである。ところがやはりさうした意味の熟知に達する前に私らは無差別混乱の地位をもつてゐるのである。

赤兒は、眼、耳、はな、皮膚、内ざうの諸感覺を刺戟されたとき、それらすべてをたゞ一つの混乱渾沌として感じる。とウィリアム・ジェイムズはその「心理學原理」(W. James, *Principles of Psychology*, vol. I, p. 488.) にうてをる。が、これはまづたゞはじめての事に於ては成人の場合でも同じである。たとへば私らの知らぬ外國語、たとへば支那語、の話される音をきいてゐるとなになにやらちつともわからぬ一つの渾沌でそれはある。ところがその言葉の音にだんだんなれてくると、すなはち意味を了解するやうになると、その言葉の言が一音一音に質や量を異にしたものとして知ら

れ、またその意も知られる。すなはち音が定まつて分明になる。それはまた種族の異なつた外國人をみるときでも同じである。私ら日本人にとつては白色人種はだれをみても同じ顔をしてゐるやうである。しかしだんだんなれてくるとその中にイギリス人、ドイツ人、フランス人、ロシア人などの顔が見わけられるやうになり、さらに進めばその個人個人の特殊の特徴もはつきりしてくる。自國人のあひだにおいてはどんなに似た人たちのあひだにも——極端な例をとればどんなに似た双生兒の顔にも——差別を見出しうる。そしてその差別になれるに従うてその差別ははつきりと私らの心に恒常的につかめるものとなる。直接了解はそこで混亂渾沌の中にはつきりした區別と矛盾のない恒常さとを導きこむことによつて行はれるやうになる。

(二) 實際の反應活動が混亂を開く

意味ははじめの實際の活動を通してあたへられるものである。たとへば子供は物をころころまろくころがすことによつてその物のまろさを知る、はねさせることによつ

てその弾力性を知る、放り出すことによつてその重さを知る。すなはちまろさや、弾力や、重さなどは單なる五官を通してその意味が知られるのでなくて、實際の活動を通してである。そしてその活動は反動として、子供にはたらきかへしてをる。投げた、はねた。それに對して子供はこれはなんだらうと反應する。その反應の重なるにつれて意味がはつきりと定められるのである。たとへば子供は色の諸差別をなかなか知りがたい。成人が見ればあまりにあきらかすぎるやうな區別でもなかなか子供にはわかりにくい。もとより子供はすべての色を一つに、無差別に、感ずるのではないけれども何がその區別をなすかを知的にしない。あか、みどり、あをなどの差別がその色に特有の反應を呼び起してその區別をはつきりさせようとしなない。けれども多くの諸物の色を見てゆくうちに、それらに對する反應が固まつてきて、白はミルクの色だとか、赤はすきな着物の色だとかいふやうに、差別づけられてきて、はじめの渾沌の色がはつきりと開かれてくる。そしてつひには諸々の色の意味がたゞちに知られ

るやうになる、直接了解されるやうになる。

その他すべての諸意味はみな混亂の中から開かれてはつきりと區別づけられ定明されたものである。これを摘要して次のやうにいはう。「諸意味の熟知といふはかくして。諸物が私らの前に呈出されたときに、それがしの可能な諸結果を、反省的思考を用ひずに、先見すべく私らを導くところの明確な反應の諸態度を、私らが獲得したことを。示してをる。その期待の明確さは意味を定明する、すなはち漠としたどろどろのものの中からその意味を取り出す。その習慣的くりかへす的の性質はその意味に恒常性、不變性、堅實性をあたへる、すなはち波のゆれうごく定めなきものの中からその意味を取り出す。」——「どう私らは考へる」一二五頁。

### 三、概念と意味 (CONCEPTIONS AND MEANING)

一口にいへば明確な意味が概念である。

意味といふ言葉は毎日に用ひられるごく普通の言葉であり、また概念といふのもきはめて一般に用ひられる術語である。「げんみつにいへばそれら二つはしかし何ら新しいものをふくんでゐない、直接につかまれたどちに用ひられるべく充分に個別化された意味はすべて概念 (a conception or notion) である。」——「どう私らは考へる」一二五頁。

1. デューイは觀念意味概念をきはめて不規則に用ひる。こゝには意味をいままでに最も多く用ひた意味での觀念と同じ意味に用てをる。觀念と概念も混同される場合が多い、たとへば事實と觀念といふときの觀念のうちには概念もふくまれてをる。がその三つをわけようとならば、觀念をばこゝにはゆる意味と同じ意味に、あるひは思考の過程中の道具の意味に、とり、概念はそうした意味ないし觀念の個化され標準化されたものとみればよいであらう。

その如く個化された意味は標準化されてをるを要する。もしメートルやグラムが時々その標準をかへたとしたら、私らは大きさも重もはかれないであらう。もつともこれはまづたく絶對的な意味に於てとはない。けれどもとにかく或程度までの恒常さ、



堅實さ、を概念はもつてゐねばならない。

さて概念の根本の重要を説くことは今はもうすでに述べたところを摘要的にくり返すまでのことである。すなはち「概念あるひは標準化された意味は、(一)同アイデンティフィケーション化の、(二)補サプリメンテーション充エンリッチメントの、(三)組織のうちに位置づけることの、道具である。」——「どう私は考へる」一二六頁。

いまこの三つをさらに簡単に説明する。たとへばいままでに見られない光の一點が天上に見出されたとする。こゝに諸意味の貯へがあつて、それを道具にして研究し推理することができるのでなかつたら、その光の一點はたゞ五官にかく見えるそのまゝのもの、たゞの光の一點、であるほかはない。といふのもそこには視覚神經のたゞの刺戟興奮があるだけのことであらうから。ところが過去の經驗でえられた諸意味なる財産があたへられてゐたら、この光の一點は、適當な諸概念を方便に使うて攻究される。それは小遊星アスタロイトであらうか、慧星であらうか、それとも新らしう出來つゝある太陽

であらうか、あるひは或る宇宙的衝突または分解から起りつゝある星雲であらうか。これらの諸概念はそれ自らのそして異なつた性質をもつてをる。それからそれらをつろいろめんみつにたゆまず研究する。その結果それは、その光の一點は、慧星であつたとわかる——すなはち慧星として同アイデンティファイ一ファイ化される。すなはちその光の一點は慧星といふ個化され標準化された概念を通して、慧星としての同一性と不變性とをえてをる。

そこで補充(supplementation)が行はれる。これまでに知られてゐる慧星のすべての諸性質が、たとへまだ觀察されてゐないでも、この特個のものの中に讀み込まれる。過去の星學者たちが慧星の軌道や構造について學んできたすべてのことが、その光の一點を解釋するに役立つ資本となる。

そして最後にこの慧星の概念はそれ自身孤立したものではない。それは星についての知識全體系の關係づけられた一部分である。諸太陽、諸遊星、諸衛星、諸星雲、諸

彗星、諸流星、星塵——等々これらすべての諸概念は相互に一定の關係交渉をもつてを  
る。いまその光の一點が慧星なる意味として同一化されると、それはたゞちに、信念  
のこの大きい王國の完全な一員として採用されるのである。

終りにさうした知識に對するその組織の重要さを見る。ダーウインはそのある小さ  
い自叙傳的文章のなかにのべてをる。——彼がまだ若いときに英國のまんなか邊の磯  
の凹みの中から熱帯産の貝殻を見つけだして、そのことを地質學者のシヂェウイック  
に語つたところ、それはきつと誰かゞそこにもつてきてその貝をすてたのにちがひな  
いといひ、さらにつけ加へて、しかしそれがほんとうにそこに埋まつてゐたのなら、  
それは地質學にとつてこの上もない不幸だ、といふわけは私らがミッドランド・カウン  
ティの地の表面にある砂土等に就いてもつすべての知識が、そのために投げすてられ  
てしまふから」といつた。といふのも、その砂土は氷河的のものになつてゐたから  
である。それからそれにダーウインはつけ加へていつてをる。「そのとき、シヂェウ

イックが熱帯産の貝が英國のまんなかの地の表面ちかくに發見されたといふこれほど  
のおどろくべき事實に對して喜ばなかつたのを見て、私はまつたく驚いてしまつた。  
科學は諸事實をよせあつめてそれから、一般的法則すなはち結論を引き出すことから成  
り立つてゐるといふことを充分に私に知らせるものはこれまでにはなかつた。」と。こ  
の例は組織化の重要なことをよく物語るであらう。(けれどもどんなに不都合な不幸な  
事實であり、それがためにこれまでの組織がぶちこわされてしまふのであつても、そ  
の組織を惜しむために、その事實を見捨てることはまつたく惡ひことである。)

#### 四、概念についての誤解

以上のところでは概念は諸特殊者を位置づけまた同一化するための標準的法則を供  
給する意味であるとされてをるが、この考をいま盛んに行はれてゐるあやまつた考へ  
と比較してみよう。

## (一) 概念は活動的態度であつて靜的な殘物ではない

概念は多くの諸物についてそれぞれに於て異なつた諸性質をすて、あとに残つた共通の諸性質を留めおくことによつてつくられるものではない。さうしてあとに残された共通のあまりものが概念となるのではない。ことに概念は多くの諸物を一度に眼のまへにあつめておいてその中から共通の諸性質をぬきとつてつくられる如く思はれるが、實際に於ては一度にではなく、一つ一つに就いて行はれるものでこそある。

子供が犬の概念をつくるには、自分の犬のフアドウ、隣りのカロー、従兄のトレイ等々の多くの犬をよせあつめ、それからそれらの犬を色や大きさや形や足の數や毛や消化器や等の諸性質に分析し、それからその中の共通でない性質、たとへば色、大きさ、形、毛などの諸性質をすてて、共通のたとへば四足であること、家畜であること、肉食すること等々の諸性質を保存する。かうして保存された性質から犬の概念がつくられるといふ。

しかし實際はさうではない。子供は自分が最初に見た、あるひはきいた、あるひは手であつかつた、一匹の犬からまづはじめ、その一匹の犬について彼の心を捕へたものが犬の概念の初めになる。そして彼はそれを一つの經驗からまた次の經驗へともちこんでゆく、いひかへれば前に見た犬からえた諸特徴をばまた次に見るであらう犬に期待する。そして何かそれについて刺戟するものがあると彼はすぐにその期待をあてがふ。そこで子供は猫を見て「小さい犬」といひ、馬を見て「大きい犬」といひかも知れない。しかし他の期待された諸特徴——活動の諸様態——が新らしく出あふた犬に見つからぬときはそれは「犬」の意味のうちからすてられねばならない。と同時に期待した諸特徴が期待通りに見出された場合には、それは特に選出されて強調される。さらにのちのちの犬に適用されるうちにその意味はだんだん明確になり、精練され、そして標準化されてくる。そしてこの標準化された「犬」の意味はこれから犬を了解するときのよき道具となる。その標準化された意味が——前にもいつたやう

に——概念である。そこで概念は活動の態度である。それは決して靜的な沈澱物ではない。

(二) 概念はその諸成分の故に一般的であるのではなく、その一般性に適用される故に一般的なのである

(一)にのべたことからの必然の結論として、概念は共通の殘餘物をその成分にもつが故に一般的であるのではないことがわかる。得られた意味はのちの了解のちの經驗の道具となる。すなはちその意味は他の諸經驗にも一般に適用される。この故を以て、概念は一般的なのである、一般に通用するのである。概念の一般性はその諸成分によるのではなくそのはたらきによるのである。共通の残りものの集合はいはば死にくさつた頭——價值なき死體——である、すなはち *caput mortuum* である。そんなものはどれだけたくたんの物から集められたものであつても、たゞの集合であるにすぎない、それは一般概念ではない。他の經驗に一般に適用されてそのはたらきをなしてこそまことの一般概念である。

## 五、意味の定義と組織

### (一) 意味(概念)の内包と外延

さらに知るはたらきをもたぬものたちはすくなくともまちがつて知ることはない、いはゆる誤謬におちることはない。が意味といふ道具を使ふて解釋判斷推理をする人たちはなかなかまちがひをしがちである。そのまちまがひの源はいつも意味の不明からである。もつともまちがつたくまちがひの起らないやうにすべての意味を定明にすることは絶對的にはできないことであらうが、しかし相當の程度まではつとめてその不明を去り定明にせねばならぬ。そのためにはゆる意味の定義が行はれる必要がある。

意味の定義をするにはまづ意味の内包と外延とを考へる必要がある。

(形式論理學に於ては、その概念のふくむ共通の諸性質を内包といひその概念の被ふ具體の諸物全體を外延といひ、そして概念すなはち意味、の定義は内包の方面からと外延の方面からの兩方から行はれ、内包的定義は普通に定義といはれ、外延的定義は普通に區分といはれる。こゝに於ても内包、外延、定義、區分がとかれるが、すでに立場が動的立場になつてゐるのでその説明がまづたく異なつてくる。)

「明瞭明白であるためには、意味は分離されて、單一であり、獨り包む的であり、いはゞ同質的で、どこでもいつでもあらねばならぬ。そんな具合に個化された意味に内包(intension)といふ術語があたへられてをる。意味のさうした單位に達し(また達しえたとさそれを叙述する)過程を定義(definition)といふ。人、川、種子、正直、資本、大審院、等の諸名辭の内包はそれらの名辭に排他的に特徴的に附着するその意味であ

る。この意味はそれらの名辭の定義の中に入れられてをる。」——「どう私らは考へる」——一三〇頁。

こゝにいふ定義はいはゆる内包的定義である。内包的の定義と内包とははなれない關係がある。そして内包といふは、ごく一口にいうてしまへば、抽象的に考へられたその意味そのものである。

次に外延はその意味の適用である。「意味の明確さのテストは、その意味の例となる諸物の一群を、他の諸群、殊にほとんど近い意味をもつ諸物の諸群、から區別づけることに成功するか否かである。河なる意味(あるひは性質)はロウン河、ライン河、ミシシピ河、ハドスン河、ウォーバッシュ河等を、その位置、長さ、水の質等の諸差異があるにかしはらず、指示する役に立たねばならぬ、また大洋の流れや池や小川を暗示しないものであらねばならぬ。このやうに、異なつた諸存在物の雑多を區別づけまた一つにまとめるべく意味の役立つことが、その外延をつくる。」——「どう私らは考へる」

一三〇—一三一頁。一口にいへば意味をその適用に於てみたときその意味は外延である。いひかへれば、適用された諸物が外延である、ともいへる。

### (二) 定義と區分

内包をのべるものは定義である。と、外延をあきらかに示すものは區分(あるひは分類)である。そこで定義と區分とは同じ一つの意味、すなはち概念、についてなされる定明の二つの道である。それら二つはそれぞれ逆の道を行く。

そこでこの二組、すなはち定義と區分、内包と外延、はあきらかに相關的である。まへにもいうたやうに、内包は諸特殊者を同一化する原理としての意味であり、外延は同一化された區別づけられた諸特殊者の群である。意味が諸特殊者を指示しなかつたら、それは外延としてとりとめもないものである。また諸特殊者も意味によつて一つの内に包まれなかつたらまつたくばらものになつてしまふ。内包と外延、定義と區分が共に行はれればはつきりした意味とその意味のかゝはる諸特殊物とが一

つに結んで知識の組織ができる。組織だてられた組織、すなはち科學は、かならずこの兩方面をもつ。すなはち「定義と區分とは科學の標しるしである。」

### (三) 定義の種類

定義に三つの型がある。指示的、解釋的、科學的。このうちではじめの指示的定義と後の科學的定義とが論理的意義をもつものであつて、解釋的定義はほんの中間的、第二次的、の意義をしかもたない。

#### A—指示的定義

それこれと指し示してその意味をあきらかにしまたは直接に經驗さしてその意味を明らかにする定義でこれはある。いひかへればこれは諸物に對して一定の態度をとらせることによつてその意味を明らかにするのである。これには色や音や味や、それから情緒的の諸性質が直接に用ひられる。正直、同情、嫌惡、おそれ等は個人に直接經驗させなければその意味がつかまへられぬものである。

## B—解釋的定義

指示的にえられたそれがしの諸意味の貯へがあると、私らはそれを想像的にくみあはせて間接に或る物の意味を定義することができる。たとへば緑と青との色がわかつてをれば私らはそのあひだの色を「緑と青のあひだの色」として定義することができる。虎を知らない人に對して私らはその虎を 猫族の特徴と虎のくらゐの大きさや重をもつ他の物とを以て、定義することができる。辭書の解釋説明はこの定義の例である。しかしかうした定義は第二次的のものであつて正直のものではなく、いろいろ危険を伴ないがちである。

## C—科學的定義

まへにあげた二つの定義はどちらかといへば通俗のものでありがちであり、従つてその同一化や分類は知的でないがちである。鯨を魚とみることも通俗にはさし支へないまた役に立つ定義である。さうした定義は眼によく目立つ特徴をとらへて述べら

れる。ところが科學的定義は因果、産出、發生の諸事情をその特徴的本質として選出す。通俗の定義の用ひた諸特徴は、物がどうしてその共通の意味や性質をもつかを私らが了解する助けにならない、それはたゞそれがさうした諸特徴をもつ事實を述べにすぎない。因果的發生的定義は物の構成される道をば、その物がそれがしの種類に屬してをることの鍵として定め、それに依つてその物が何故にその種類すなはちその共通諸特徴をもつかを説明する。」——「どう私らは考へる」一三三頁。

「この科學的定義は、直接に知覺された諸性質あるひは直接に有用な諸性質の上に建てられるものではなくて、それがしの諸事物が他の諸事物に因果的に關係づけられる道に依つてつくられる。すなはちそれは關係を示すものである。」——「どう私らは考へる」一三四頁。

## (四) 科學

科學的定義を用ひて組織立てられた知識の體系が科學である。化學、物理學、數學、

生物學等の諸科學はそれぞれの分野に於て因果關係の科學的定義、意味、概念をさぐり、それを一體の組織につくる。かうすることによつて私らの知識はその正確さをま

す。  
「短かくいへば、諸物の靜的にもつ諸性質をのべる代りに、諸物のいかに相互に依りあひ、またはたがひに影響するかを示す程度に従うて、私らの諸概念は定明な個性と一般性（すなはち適用性）の、最大量を獲得する。科學的諸概念の組織の理想は任意の事實または意味から任意の他の事實または意味に移りゆく推移の繼續、自由、可撓性を獲得することである。この要求は、諸事物を繼續的に變化し行く過程に於て一つに結び合せる動的關係——すなはち生産あるひは生長の様式への洞察<sup>インサイト</sup>を述べる原理——を私らがかまへる程度に於て、充たされるのである。」——「どう私らは考へる」一三四頁。

## 第十二章 雜記

—RECONSTRUCTION IN PHILOSOPHY, Ch. III.  
—EXPERIMENTAL LOGIC, Chs. XII, XIII, etc.  
—THE INFLUENCE OF DARWIN ON PHILOSOPHY, Ch. IV, V, VI, etc.

この最後の章は、なかばはこれまでの所説の結論ないし補ひの意味で、またなかばデューイの所説（ひいては私の立場等）、に對する誤解をとくために、かゝれるであらう。

### 一、プラグマティズムは實用主義でない

#### （一）「實用主義」の名のわさはひ

プラグマティズムにとつてまつたく悲しいことは「實用主義」の名まへのあたへら



れてをることである。これは日本に於て特にさうであるが、また他の諸國に於ても或程度までさうである。といふのは *Pragmatism* を *Practical Philosophy* の意味にとつてをる一般人が多く、またきはめて悲しいことには學者もかなりあるからである。かつて日本に於てはプラグマティズムの主張者までがプラグマティズムに「實用主義」と銘うつてそれを紹介したのであつた。またそれを歓迎する人たちもいふまでもなく實用のための哲學でそれはあると解してのことであつた。それをきびしく惡くいひ、殊にはさげすむ人たちもまたこの立場からそれをしたのであつた。けれどもこれはプラグマティズムのなんであるかを充分に了解できずしてあるひは了解することを努めさへせずに、たゞその實用主義の名まへを見てのみ思ひあるひは感ずるところによつてなされたあやまりである。

### (二) プラグマティズムの名のおこり

プラグマティズムの名まへはピアース (*C. Peirce*) によつてはじめて(一八七八年

正月)世に用ひられたものである。がその彼れのいふところによれば彼れはそれをカントの用ひた *pragmatisch* の言葉からとつたといふ。そしてその言葉を用ひたのはたんに言葉ないし概念の形式からだけの議論をさけて事實——經驗の諸結果——を充分に考へのうちにとりいれようためであつた。従うてそれには何ら實用とか功利とかいふ意味はさらにふくませられなかつたわけである。

### (三) プラグマティズムの問題

のちにこの言葉はデューイズムによつて活潑に用ひられ、やがてプラグマティズムなる哲學が形成されるはこびになつた。デューイズムに於てももちろん實用といふ意味はとりいれられてない。デューイズムはプラグマティズムは哲學的態度の問題であるとしてをる。哲學的態度の問題はすなはち哲學的方法の問題である。そこでその方法を用ひてなされた哲學の内容そのものは種々にかわつてくるわけである。この方法をデューイズムが用ひてなした哲學は「根本經驗論」、すなはち純粹經驗の哲學である。

その方法、態度、といふのは、デューイズによれば、最もはじめなるものから見ることをはじめてその最後の結果、事實、に眼を到達することである。(デューイズの「プラグマティズム」五四—五五頁。) 概していへばこの前半の態度は理性論者たちの、後半の態度は經驗論者たちのそれである。かくみればプラグマティズムの態度はこの兩者の調停である。

プラグマティズムはデューイズによれば主として態度の問題であるけれども、それはやがて他の諸問題にも開展してをる。方法と内容とは別個のものやうで、またおのづから一つになるのであらう。プラグマティズムは開展して觀念ないし真理の學說となり、さらに進んで實在(ないし宇宙そのものの構造)となつてをる。これはデューイズに於てさうであるのはもちろん、他の同じ傾向の諸哲學者に於てもおよそおなじである。もつともこのうちで真理の學說は小さい差異を除いてはほとんど共通であり、そしていづれの人に於ても充分に説かれがちであるが、實在に就いての所説は人

毎にかなり異なるつてをり、また或人はそれを特に強く説き、ある人はそれにほとんど觸れぬかの如くである。

みじかくいへばプラグマティズムは(一)哲學的態度ないし方法であり、また(二)真理についての學說であり、さらには(三)實在ないし宇宙構造についての學である。これをいひかへればプラグマティズムは(一)哲學的態度であり、(二)知識、認識、ないし論理の學であり、(三)形而上學である。プラグマティズムを形而上學に發達させたものはデューイズの根本經驗論、ベルグソンの直覺ないし純粹持續の哲學である。

(四) プラグマティズムは「實用」の意味をさらにもたない

かくみると、プラグマティズムのいづこに實用が目的されてをるか、そのいづこに實用が説かれてをるか。の疑問さへも起らないのが當然でこそあらう。

しかしそれが實用主義と誤解されたのは事實である。事實はかならずその原因をもたねばなるまい。その原因はどこにあるであらうか。その一つはプラグマティズムの

文字についての誤解、その二はプラグマティズムが、さきにピアスもいうたやうに、經驗ないし行の結果を十分に尊重するについての誤解、にある。

一五) プラグマティズムの文字についての誤解

*Pragmatism* は *pragmatic* に關係をもち、*pragmatic* は *practical* である。とみることから文字よりの誤解が出た。いかにもブラクティカルは實用的といふ意味をもつことが多いであらう。またプラグマティックといふ字がブラクティカルと同じ意味にとられるのも多くの場合である。けれどもそのはじめにピアスが解したプラグマティックの意味はまへにいうたやうにさうした俗的の意味ではすこしもなく、またその後の學者たちもそれをその如き俗の意味に解するのではなくて、その言葉がほんとうに——といふのはむしろ語源的に——もつ意味に解したのである。このことばの語源はギリシヤにある。ギリシヤ語で、*行ふ*、といふ動詞の語根は *prax* である。この動詞の變化して名詞になつたのに *praxis* がある。これは正確には *that which is done* の意

味をもつ。そこで *act* (行) とか *fact* (事實) とか *praxis* といふ意味がそれにいちばんよくあたる。ラティンの *factum* (= *that which is done*) もまことによくあたる。(英語の *fact* はそれのつゞつたものである。)

プラグマティズムはすなはち *praxis* の哲學である。すなはちプラグマティズムの文字をよくこの本質にさかのぼつてみれば、そこに實用などの意味はさらにない。まことプラグマティズムは、その名に於ても實に於ても、プラグマの哲學である。それは行の哲學である、あるひは事實の哲學である。

誤解からつくられそしてさらに誤解をまねきつゝともすれば學者にさへ平氣で用ひられてをる「實用主義」の名はその哲學の正しい理解のためにひとときもはやうすてられねばならぬ。もしその代りにどんな名を用ひるがよいかの問ひが起されたらばそれに對しては、プラグマティズムの言葉をそのまゝ用ひるがよいと答へられよう。もしそれでも、それを日本語の意味にうつさねばならぬとならば、行の哲學または事實

哲學などの言葉が、(あまりのどましくはないが、「實用主義」よりはまさつてをる故に)、よいであらう。

これまでとてもよき學者はかならずしもプラグマティズムを「實用主義」などの類にはみてゐない。たとへばウインデルバント(W. Windelband)はプラグマティズムのプラグマを行(Handlung)の意味にとつてをる。彼れはプラグマティズムの根本思想は行のために思考が用ひられるといふことであるといふ。プラグマティズムを認識論的にみるかぎりに於ての見方は正しい。たゞその行のために用ひられるといふことを、實用の意味にとつてはならない。

1. Windelband, Einleitung in die Philosophie, s. 201.

#### (六) 結果を重んずることよりの誤解

ウインデルバントのいふやうに、プラグマティストたちは思考が行のために用ひられることを説く、いひかへれば思考は生活の方便に用ひられると説く。この思考とい

ふはそのうちに觀念なし知識をふくめてもつ。この觀念なし知識が行の方便であるといふはデューイ等のインスツルメンタリズムの正面からの主張である。けれどもここにも決して實用の意味はないのである。それについての辯明はデューイ自身がしをる。

「道具主義の論理學のうける誤解のうちでもつともしつこい誤解は、プラグマティズムが知識を、實用的目的のための、すなはち實用的諸目的を満たすための、單なる道具であるとしてをる、といふ信念である——その實用的といふ言ばを物質的な、すなはちバンとバタのための、一定の實利を意味するものと考へられてをることである。"Pragmatic"といふ言葉から呼び起される習慣的な聯想の方が、どのプラグマティスのこれまでになしえた最も明瞭なまた力強い説明よりも、いまにいたるまで強いのである。しかし私はまたくり返して説明するが、"Pragmatic"はたゞ、すべての思考作用、すべての反省的考慮をば、最後の意味とテストのために、諸結果に關係づける。

といふ法則を意味するにすぎないのである。その結果の性質については何もいひはしない。その諸結果は性質に於て美的であることもあらうし、道徳的、政治的、あるひは宗教的等、私らの欲するどんなものででも、ありえやう。」——「實驗論理學」三三〇頁。

かうした誤解をうけてしまふともうそれを防ぎとめるにとても骨がをれる。それをなげいてデューイは「物語りを起すことの方が、その物語りの次から次に續いて行はれゆくのを防ぐことよりも、やさしいものだ」と、前にひいた文のはじめにいうてをる。

#### (七) デューイはプラグマティストか

プラグマティズムはそのあやまつてあたへられた名のやうな實用主義ではない。プラグマティズムをその最初の意味にとつて、哲學的態度の問題とするならばその所説の内容にはかなりの差異があつてよいわけである。現にデューイは、彼の根本經驗論をまつたくすしても、それでもやはりプラグマティストでありうると根本經驗のう

ちにいうてゐた。デューイの説いた學說そのものはかなりデューイと異なつたものである。がその態度からいへば、(またその他の可なり多くの諸點から見ても)、デューイもたしかにプラグマティストである。

もつともデューイ自身がデューイをヒューマニストと呼んでゐるところがある。(「根本經驗論」第十一章)すなはちプラグマティズムをせまい意味にとればデューイはプラグマティストではない。あのペルグソンにプラグマティクの状態はあるがせまい意味ではプラグマティストでないと同じやうに。

それからデューイは論理說の上に於ては「インスツルメンタリズム」の言葉をさかんに用ひ、また自分がインスツルメンタリストであることを充分に書きあらはしてをる。またデューイ等の説の傾向に「シカゴ學派」の名があたへられてをるが、これはデューイのあたへた言葉である。

## 二、インスツルメンタリズムといふ言葉

以上はひろい意味のプラグマティズム全般についてみたのであるが、その中の知識に關する説、すなはち論理の説、の限りにについても注意せねばならぬことがある。それはインスツルメンタリズムの言葉からくるものである。

インスツルメンタリズムのインスツルメントは普通に道具といふ意味である。そしてインスツルメンタリズムはいかにもある意味に於て——といふのはある意味に於て觀念知識眞理を道具であるとみるので——道具主義である。けれどもその道具の意味をまた解しあやまつてはならない。それは決して實際に於ける私らの實利的な諸目的を充たすための道具といふわけではない。その道具といふ意味は、かつてペイコンが、またさらにはひかしアリストテレスが、用ひたオルガノン(Organon)の香をもつものである。

「思考作用が道具インスツルメンタル的であるといふことのうちには新らしい何物もまた異端な何物もない。このインスツルメンタルといふ言葉はオルガノンの香に——新とふるとにかゝはらずに——満ちてゐるのである。」——「どう私は考へる」三三二頁。もつとも道具オルガとしての思考が思考題材の中にあるものか外にあるものかが問題になる。形式論理に於ては、その道具(オルガノン、機關、インスツルメント)はいはゆる思考の様式ないし範疇なるものであつて、まつたく思考の題材からは獨立したものである。しかし實驗論理學——すなはちインスツルメンタリズムに於ては、その道具は、(思考とその題材とは一體のものであるからして)、その外でなしにうちにある。それは思考作用とは別の題材を堀りかへす道具ではなくて、思考作用とその題材とが一體關係をなして生長してゆくところの經驗の過程中に於て、より完全な状態の經驗を構成する道具となるのである。思考、知識、觀念が道具であるといふのは、その思考知識觀念を呼び起したところの不完全な状態をより完全な状態に構成するためにそれが道具になるといふ

のである。したがうてかくしてつくられた完全な状態——知識、真理、概念——が道具であるといふのではない。もしかそれが道具となる場合は、またさらに完全な他の状態を構成するための道具として使はれる場合である。

かくみれば實驗論理學——インスツルメンタリズム——は、行の論理學である。

「インスツルメンタリズムと名づけられたプラグマティズムの論理說に於ては行あるは實行がいかにも根本の役目をつとめてをる。けれどもそれは結果の性質を説くのではなくて、知るはたらしきの性質を説くのである。前よりもつと流行的に、そしてたしかに或程度まではプラグマティズムの結果として、なつてきた言葉を用ひていはうなら、インスツルメンタリズムは思考作用と知識作用との行動主義的學說を意味する。それは知るはたらしきは文字通りに私らのなすものであることを意味する。」——「實驗論理學」三三一頁。

ついでに、あるドイツの學者がプラグマティズムを次のやうに批評したといふ。「プラグマティズムが認識論的には唯名論、心理學的には主意說、自然哲學的には勢力論、形而上學的には不可知論、倫理學的にはベントナム・ミルの功利主義を基礎とした改善論であるのはたしかだ。」——「哲學に及ぼすダーウインの影響」はしがき三—四頁。デューイはこの言葉を引いた後にたゞちにつけ加へていふ。「これはプラグマティズムがまつたくかうした怖ろしい陣容にやがてなるとでもいふのであらう、しかしたとへさうなるべきものとしても、さういふその人はプラグマティズムの聲のどうやらとゞく範圍にさへもほとんど來てゐないのである。といふのはプラグマティズムがどんなものであるにしてもないにしても、プラグマティックの精神はもともとそのやうに、どんなものでも——哲學の一つの新らしい方法といふやうなつまらぬ事柄をでも——、こんな具合に書類筆筒の柵組柵に詰め込んで片づけるといふ心の習慣に、反逆することなのであるから。」と。プラグマティズムはさうした唯名論とか主意說とか不可知論とか改善論

とかまだまだその他多くの多くの過去の固定した諸説に反対して起つたものである。それにいまさら過去の哲學の書類棚のなにかがしがしの櫛組棚に、放りこまれてはいのちがないであらう。現にこの書に於ては認識論、すなはち論理學、を主としてみてきたのであるが、それは決して唯名論(あるひは名目論、Nominalism)の一語をもつてかたづけられたものではない。またプラグマティズムは動的である。固定の既製術語でしられるにはあまりに生きすぎてをる。何は何、かはか、として組織そしきの櫛組棚せいごうばにすべての知識をしまひこんで、得意なのはドイツ人にはある。

### 三、眞理の相對性

前章までにいろいろのべてきたところを見ると絶対的の眞理はなく、それはみな相對的のものとなつてをる。眞理はそれ自身で存在する絶対的の實在ではない。それは個々の事物がそれ自らのうちにそれ自らの本來の性質としてもつてをるもの、ではな

い。さうではなくてそれは何かの地位に於てのみ問題になるものである、確實さが問題になる地位に於てのみ眞偽が問題になるのである。そこで眞理はげんみつにはその地位かぎりのものである。その地位がかはれば眞理のテストはかはる、といふのもその地位の再構成された結果がその眞理の最後のテストなのであるから。眞理が一般性をもつといふことはたゞ一つの地位に於ける地位が他の多くの地位に於てもなほ眞理として適用されうるといふことである。これはいひかへればその眞理の地位がひろげられたことなのである。そこで眞理はかわつてゆく。といふのも眞理は獨立の實在ではないのである。いひかへれば「眞理」といふはまつたく抽象名詞であつて、まことに私らにあるものは「正しい」とかあるひはもつと根本的にいへば「正しく」といふことだけである。いひかへれば私らのもつ經驗をはなれて眞理はない。經驗が「正しく」はたらくとき、いひかへれば經驗が「正しい」とき、その經驗が眞理に成されるのである。別にこれをいひかへれば眞理はあるのではない、なされるのである。



これはすでにのべられたところをまたくりかへしていうたにすぎない。そしてそのどこをみても「真理は相対的のものである。」

これに對して真理を絶対のものとする人たちからは多くの議論をなげつけられるであらう。まづ實驗論理學がする以上のやうな説明は心理學的の説明であつて論理學的の説明ではないといふ批評があたへられる。いかにもこれまでの認識論ないし論理學はまつたく（あるひはほとんどまつたく）、心理學的の考慮をしなかつたものである。そこでこれまでの認識論ないし論理學を絶対固定のものとして、それから實驗論理學を見るならば、いかにも實驗論理學は不都合であらう、いままでになされない心理學的の説明してをるから。といはれようけれども、その認識論ないし論理學はそれらの主張者にとつてのみは絶対固定のものであるにしても、他の多くの人たちには決してさうでないのである。殊に、プラグマティズムの傾向に屬する諸哲學は、實はさうした認識論ないし論理學の不十分な點に反逆して、（といふのがわるければ刺戟されて）、

その再構造を思ひたち、その結果がたとへば實驗論理學——インスツルメンタリズム——の如きものを産んだのである。それ故に絶対論者たちが、プラグマティズムの反對して立つた（あるひはその發足點であるところの）その立場から實驗論理學が心理的の説明をしたことを攻撃するのは、すくなくとも攻撃の立場をあやまつてをるものである。

また心理學と論理學ないし認識論とは共通の範圍をもつてはならない、交はりあうてはならない、といふことを頭から假定する必要はない。過去にそのやうな區分ができたからとてその區分がどんな不便をしのんでまでも永久に保存される必要はない、心理學が認識論的にならうとも、認識論が心理學的にならうとも、よき結果を産まうならば、それはさまざまげらるべきではなくてむしろすゝめらるべきであらう。それは雜種であつてもよい、よき雜種でさへあれば。

いつたい過去の區別にこだわるものは絶対論者たちである。プラグマティズムに對

するさきの批評（三〇九頁参照）の如きもその傾向をあきらかにあらはしてをる。そしてこれはまた單に學說上のそれにかぎらず社會生活、國家生活、のそれに於ても同様である。

要するに、論理學ないし認識論——（もつともデューイは自分の説は「認識論」ではないといふ、いかにも彼の説は、過去の認識論ではない、それゆえ彼の説をもよくめて認識論といふときは認識論の意味がそれだけ大きくなつてをるわけである）——が心理的説明をとり入れたからとてわるくいはれてはならない、わるくいはれるべき點はその説そのものの本質、内容、の中にさがし出されねばならない。

それでは、——と絶對論者はいふであらう。それではその内容についていふが、さうした實驗論理は知識の發生を説明し、その知識と經驗ないし生活との交渉を説明することはできるが、しかし私らの思考ないし知識が認識として成立しうることの根據はどこにあるか、その權利はどこにあるか、いひかへれば思考ないし知識の眞理性は

どこにあるか、は説明されてないではないか、さらにいひかへれば認識の時間的起源が經驗にあるにしても、認識の價値の根據がそれにあるのではないのだ。と。しかし絶對論者は何の故にその根據を求め、その權利をいひ、その價値をいふか。彼の心を解剖したらば、おそらくは彼らはその根據、その權利、その價値を超經驗の境に求めようとするのであらう。そこにそれを求めうるか得ないかはまづ後の問題として、その如き根據、權利、價値は、求めずともすでに經驗のうちにあるのである。これらのことについてはこの書のうちには説かれてはない。しかしそれは以上にのべた限りに於ては問はれずともよい問題なのである。しかし、問はれたならば答へられるであらう。けれどもその答はやはり相對的の根據、相對的の權利、相對的の價値を解くにすぎないであらう。さうしてこれがすなはち絶對論者たちにとつて最も不滿な點なのであらう。といふのは實は彼らが求めてゐるものは、絶對のそれらである。それなればいかにもそれらは經驗のうちには求められない。

眞理性についても同様である。眞理についてはすでにこの書には充分にのべられてをる。しかしそれは相對の眞理である。彼らがさらに求める眞理はいはずともあきらかな絶對のそれである。

プラグマティズムは、インスツルメンタリズムは、その如き絶對をそれほど欲しがらないのである。もとよりあれば望まれしよう。しかしないと知るが故に望まぬのである。また一面にはそのやうな絶對をもたずともな一つ不自由もなく相對の世界によろこんで住めるのである。

もつともたとへばデューイムズの如きは絶對なるものを考へぬではない。しかしそれは經驗の限りに於ての絶對である。それは相對のヴェイルにおほはれた限りに於ての相對的絶對である。

ところが絶對論者の望む絶對は經驗を超へての絶對である。いまかりにその絶對を眞理の絶對についてみる。彼らもこちらと同様に經驗の限りに於ては不變絶對の眞理

すなはち彼らの言葉に依れば眞理として認識された事實にして不變絶對のもの——をみる事ができない。しかしその認識の客觀性の基礎となる眞理は絶對不變である。前者は無常であつても後者は永遠に恒常である。それではその後者は何か。あるひはそれを關係であるといひ、あるひはそれを絶對的實在であるといふであらう。こゝに絶對的實在といふはいろいろの意味に翻譯されうる。過去の形而上の説くいはゆる實在などもそれである。その如き實在を絶對の眞理とみ、それは無常の經驗の世界には足もあらずさぬものであるといふ論はこゝに反駁する必要もあるまい。がそれとはちがつて絶對の理性等をその超經驗の實在であるとする者らがある。しかし超經驗の理性なるものあることを私らはどうして知つたか、私らのもつすべてが經驗である以上私ら以外の理性を私らはいかにしてもちうるか。もしそれがほんとうに經驗外のものであれば私らはそれをもつ事ができないであらうし、またもし私らがそれをもちうるものならばそれはやはり經驗であるにすぎない。(こゝに注意せねばならぬこと

は新しい經驗論者のいはゆる經驗は私らのもつすべてであることである。これは最初の公準であつて證明を許さぬまた證明する必要のないものである。新しい經驗論の批評者はまづこの公準を知る必要がある、それでなければ彼れと我れとの解する經驗なるものの意味が一致せず、したがつてすべての議論は共通の基礎をもちえぬのである。もしそれが、すなはち理性が、經驗のうちのものとなればもはやそれは絶対のものではない。」

それでは關係を絶対のものとする見方はどうか。こゝでもしかし關係がまつたく經驗外のものであるならばそれはやはり一種の超經驗の實在となる。それを經驗中のものであるとするならばそれはつまり經驗の一種となり、プラグマティズムの見る——殊にデュイムズの見る——關係と同じものになる。そしてそれはいふまでもなく相對的のものとなる。いかにも絶対な關係の如く見ゆるものもおしつめればやはり相對的に絶対な、すなはちかりに絶対な、ものであるにすぎなくなる。經驗のうちにはある

がしかし經驗ではないとする見方もあらう。その見方はしかし、ひろい意味の經驗のうち、關係の經驗と、關係以外の經驗とをわかし、後者のみを經驗と見て前者は經驗でないといふのであるにすぎない。さうであるとするればその見方とプラグマティズムの見方とははなはだ實に於ては接近してをり、たゞ經驗の意味を異にする點に於て異なるだけである。もつとも彼らが關係を經驗でないといふのはそれを絶対であらせようためである。しかしその關係はいまもいうたやうにたゞ絶対のごとく見えるだけである。關係の絶対論者は、どの道から見ても絶対であるところの關係を、相對論者たちの前に提出するがよい。そのとき相對論者はその相對性を指し示すであらう。

もつとも相對論者も經驗の限りに於て絶対な關係を説くことはあらう。しかしそれは絶対に絶対なものではなく相對の下に於て絶対なものであるにすぎない。

「いつたい經驗外のものがかりにあるとしても、それを真理の最後のテストであるとすることは自己矛盾である。といふのは經驗以外のものが最もたしかであるといふこ

とは何によつて知られてゐるか、それは確かであると知られてゐるのではなく實は假定されてゐるにすぎないからである、確かであればよいと望まれてそのさうであるかないかはさらに確められずにたゞさうであると理由なしに定められてゐるにすぎない。経験以外にたしかなものがあるといふなら、そのたしかであることが證明されてゐねばならないのである。それを證明するに何で證明するか。その證明こそ経験によつてなされてしかるべきである。

絶對論者らの權利といひ、根據といひ、價值といひ、眞理性といひ、それらはみんな経験をいはゆる基礎づけるための要求であるが、それらをあたへる實在が経験外にあるとしたら、その實在の確かであるかないかは最も不確かである。といふのは私にその確かさを信ぜさせる術が、假説ないし盲目的の信仰を置いてはないからである。一つの経験の根據、權利、價值、眞理性等は他の諸経験によつてなされる外はあるまい。すなはちそれらは経験相互の相對のものである。

その相對諸経験のうちにはゆる理性を認めるのはまた別の問題である。けれどもそれはどこまでも経験であることを忘れてはならない。デューイのいはゆる智性（インテリヂェンス）はその意味に於ての理性であることは第二卷の哲學說の研究のうちにあきらかにした通りである。

眞理は経験のうちにおいてははたらき（諧調といつてもよからう）によつてその眞理性をたしかめられたものである。といふことをいひかへれば、経験に役立つことが眞理性をあたへるものである、といふことにもならう。またこの経験を生活といふ言葉にかへれば生活に役立つことが眞理性のテストであるといふことになる。この限りに於ては眞理——知識、思考——は生活の道具なのである。このとき生活といふを實利的な衣食住のこととはやがてんする人にはプラグマティズムはたゞちに「實用主義」のごとく見える。しかしその生活といふはいはゆる経験の異名であつて、かならずしも實利的のものではないのである。

これに關連してよく絶對論者からきかされる言葉がある。それは、眞理が經驗なし生活に役立つとしても、役立つが故にそれが眞理なのではない、といふことである。彼らはしかしこゝではたゞ經驗に役立つことと眞理性との二つを分析しだしてをるだけである。思考の上において二つに分析されたものが不即不離の關係をもつてはならない道はない。この二つを私らはわけて考へることはできる。しかしわけられた二つが當然一つに結びあはさるべきであることを、私らはこれまでに度々説いたやうに、見てきたのである。絶對論者たちのこの言葉は、實は、他に絶對の標準をすでに假定してをる故に、この二つの關係をさいたのであらう。それを二つに分析したばかりではその二つの無關係であることの證明にはならないのである。

## デューイ論理學說の研究 終

## デューイ論理學說の研究索引

(排列は音の順序、たとへばエはエに、クはカに。)

### ア

アクトテレース (4, 15, 16, 32, 306)

暗示(212—, 221—, 230, 233—, 249, 262)

暗示の段階(212—214)

### イ

インスツルメンタリズム(「眞理」をみよ)(29, 31, 34, 38, 39, 40, 50, 122, 187—, 200, 262, 303, 305, 308—310)

印象(100, 114, 133, 139, 155—)

一般(56, 58, 147, 216, 286—)

一般原理(248, 233)

意味(「觀念」をみよ)(122—, 127—, 129—, 153, 155—, 171—, 173—, 184, 188, 200, 218, 219—, 221—, 227, 252, 259, 268—294, 290)

意味の妥當性(173—184)

意味と了解(268—271)

意味を捕へる過程(274—278)

意味の定義と組織(287—294)

意味の内包と外延(287—290)

### ウ

ウィンデルバント(303)

### エ

演繹論理(16—17, 31—35, 199—, 219—, 245—)

演繹運動の指導(245—249)

演繹の指導者(243—247)

### オ

オルガノン(306, 307)

行(27)

行の哲學(301)

應用論理學(56, 62, 63)

### カ

解釋的定義(292)

間接了解(271—274)

感じられた困難の段階(208—210)

カント(4, 9, 10, 11, 54, 57, 91, 115—)

カント・ロツチエ・デューイ(15—16)

價值(103, 113, 150)

假設(假説)(34, 76, 213, 248, 262)

科學的定義(292)

科學(26, 71, 232, 291, 293—294)

科學的研究の歴史的段階(73—75)

索

引

—

科學的歸納法(235—239)  
 懷疑論(195)  
 觀察(207, 217, 236—, 249)  
 觀念(「意味」をみよ)(72, 100—, 129—, 139—, 143—, 153, 154—, 171—, 173—, 200, 213, 218, 249—, 278—, 283—)  
 觀念の妥當性(173—184)  
 觀念の起源と性質(259—267)  
 觀念と判斷(259—261)  
 觀念の性質(261—264)  
 概念(17, 138, 176, 199—, 260)  
 概念と意味(278—283)  
 概念についての誤解(283—287)  
 外延(287—)

キ

キケロ(6)  
 歸納論理(15—17, 31—35, 52, 219—, 233—, 245, 246)  
 歸納と演繹(29—, 221—223)  
 歸納運動の指導(232—)  
 客觀(61, 124—, 152)  
 客觀性(133, 152, 177—)  
 教育學(13)  
 ギリシャ哲學(4)  
 疑問(「問題」をみよ)(262)

ク

クローチエ(6—57)

ケ

經驗(8, 9, 10, 11, 12, 310—)  
 經驗の諧調(154, 196, 197, 318)  
 經驗と理性との改造(8—12)  
 繼續(72, 76, 77)  
 繼續關係(130, 214)  
 形式論理(15—17, 20—21, 122, 200, 250, 260—,  
 結合(114, 159)  
 結合關係(114)

コ

古典哲學(4, 5)  
 行動主義的學說(308)  
 行動主義の心理學(81)  
 困難(「問題」をみよ)(208)  
 困難ないし問題の定明(210—212)  
 混亂(「問題」をみよ)(208, 274—)  
 根本經驗論(297)

サ

三段論法(15—17)

シ

心象(101, 206)  
 シカゴ學派(305)  
 シカゴ學派の論理學(26)  
 思考(22, 23, 27, 41, 42, 43, 85—, 90—, 138—, 152—)  
 思考一般(56, 191, 201)  
 思考とその題材(53—89)

思考地位(63—, 133)  
 思考の先件と刺戟(90—121)  
 思考の先件(64—, 90—, [ロツチエの]94—, 99—, 134—138, 148, 218, 253—)  
 思考の様式(65, 138—142, 185)  
 思考の内容とその客觀性(152—198)  
 思考の内容(152—, 155—)  
 思考の妥當性(170—198)  
 思考産物の妥當性(192—197)  
 思考一般の妥當性(184—192)  
 思考のテスト(196)  
 思考經驗全體の分析(199—218, 207—218)  
 思考の段階(207—218)  
 眞理(27—31, 35—40, 310—, 318)  
 眞理と生活(27—31)  
 眞理の意味(35—40)  
 眞理の相對性(310—322)  
 進化(86—)  
 自然觀(7—8)  
 指示的定義(299)  
 刺戟(85—, 90)  
 蒐集と比較(239—)  
 宗教的信念(2—3)  
 主觀(124—)  
 主觀客觀の分化(124—127)  
 主觀性(133)  
 主辭(18, 19)

實驗論理(「インスツルメンタリズム」をみよ)(53—56, 57—67, 67—80, 82, 307, 308, 312—)  
 實在(19, 68, 71, 72, 149, 318)  
 實在一般(「對象一般」をみよ)(19—31)  
 實驗(207, 217, 241—)  
 實驗心理學(81)  
 實驗的立場の根據(67—80)  
 實用主義(295—)  
 實在者(19)  
 純粹理性批判(54)  
 粹粹經驗(297)  
 事實(227, 301)  
 地位(33, 64, 115—121, 165, 182, 208—, 254, 307—)  
 地位なるもの(116—118)  
 地位の客觀性と主觀性(120—121)  
 地位の分化(124—134)  
 地位の定明(207)  
 地位の診察(211—)  
 熟知(274—)

ス

スピノーツァ(32)  
 推理(17, 138, 200, 214, 249)  
 推理開展の段階(214—215)

セ

生活體(102)



先驗論理學(54)  
 先件(「思考の先件」をみよ)  
 前提と結論との關係(224—)  
 絶對(312—)  
 絶對論者(312—)

ソ  
 組織(291)  
 組織的推理(「歸納と演繹」をみよ)  
 綜合(264—)

タ  
 對象一般(191)  
 題材(53—, 68)  
 題材一般(191)  
 ダーウイン(8, 241, 282)  
 妥當性(35, 66, 83, 84, 87, 154, 170—, 218, 249)

チ  
 知識(3, 5)  
 智性(13)  
 智性の思考作用(46—48)  
 直接了解と間接了解(271—274)  
 直接經驗(12)

四 中世哲學(4)  
 ゼイムズ(6, 44, 49, 81, 297, 298, 304, 305)  
 ゼエヴォンズ(213)  
 チョウンズ(141)

テ  
 哲學の回顧(1—12)  
 哲學の意味(1—6)  
 哲學革新の諸動機(6—8)  
 定説(213, 262)  
 定義(288, 290—)  
 定義と區分(290—291)  
 定義の種類(291—293)  
 デカルト(32)  
 デモクラシイ(7)

ト  
 特殊者(「一般者」をみよ)(147, 216, 290)  
 道具性(117, 262)  
 道具主義(「インスツルメンタリズム」をみよ)  
 ドイツ哲學(4)

ナ  
 内容(「觀念」「意味」をみよ)  
 内包(287—)

ニ  
 人間性(1—3)  
 認識(54—)  
 認識論(20, 26, 312—)  
 認識論的論理學と實驗論理(53—56, 57—67)  
 如實の思考(201—207, 207—)  
 日常經驗(228—)

ハ  
 判斷の三要素(252—259)  
 判斷と推理(251—252)  
 判斷の三要素(251—259)  
 判斷(18, 19, 138, 140—, 200, 250—267)  
 範疇(21, 54)  
 反應(85—)  
 反省的思考(206, 219—, 227, 303)  
 反省的思考の二重運動(219—232)

ヒ  
 賓辭(17, 19)  
 表象(139, 142—, 155)  
 比較(239—)  
 ヒューマニスト(305)  
 ビヘイヴィオリズム(82)  
 ビーアス(296)

フ  
 ファイヒンゲル(31)  
 フラトーン(4)  
 プラークマ(301, 302)  
 プラグマティズム(6, 295—305, 309—)  
 ブラッドリ(57)  
 分析(264—)  
 分析と綜合(264—267)

ツ

ヘーゲル(22)  
 ベイコン(フランス)(7, 17, 32, 52, 306)  
 ベルグソン(6, 299)  
 ベンタム(309)

ホ  
 ボウズンギット(23, 57, 141)

ミ  
 ミル(16, 17, 32, 52, 309)

メ  
 命題(250)  
 名辭(260)

モ  
 問題(121, 208—, 210—, 253—)

ヨ  
 與件(122—, 127—, 139, 165, 219, 234)  
 與件と意味(122—151)  
 與件と意味(127—134, 219—)  
 與件と意味の間の往復運動(219—221)

ラ  
 ライブニツ(32)

り

理性(8, 9, 10, 11, 12, 69)  
 理性の思考作用(48—)  
 理説(76)

立證結論の段階(215—217)  
 了解(271—274)

ロ

論理學(14, 20—21, 22—26, 41—46,  
 59—61, 87—)

論理學の問題(12—13)

論理學の再構成(21—27)

論理學と心理學との關係(80—87)

論理學を廣い意味にとつて(88—89)

論理學と歴史的方法(83—)

ロク(32)

ロッチェ(23, 58, 61, 64, 91, 94—, 98—,  
 100, 104—, 115—, 133, 141, 142—,  
 149—, 155—, 170—, 194—)

ロッチェに於ける矛盾(104—115)

ロッチェの先件とデューイの先件との比較(118—119)

ロッチェの説の批評(142—151)

ロッチェの論理説(149—150)

六

a antecedent (93)  
 b Bosanquet (23, 57) Bradley (57) Begriff (138, 176)

c Croce (57) continuity (72) coherence (114) coincidence (117) connection (117) conjecture (213) conception (279) caput mortuum (282)  
 d datum (93) Denken überhaupt (201) definition (282)  
 e Erkenntnistheorie (20) Epistemology (20) Epistemological Logik (54) Eindruck (100, 155)  
 h hypothesis (219) Handlung (302)  
 i Instrumentalism (29) impression (100) idiatum (129) inference (214) intension (288)  
 j James (44) judgment (252) *locas and situs* (98)  
 l meaning (129)  
 n notion (279)  
 o (the) objective (131)  
 p proper objective (93) pragmatism (296—, 300) practical philosophy (296) Peirce (296) pragmatish (297)  
 r reasoning (214) reality überhaupt (56) Radical Empiricism (81)  
 s situation (182, 208) situa-

tion as a whole (191) Schluss (138) supposition (213) supplementation (281)  
 t transscendentale Logik (54) thought überhaupt (56) thought situation (64) thought per se (66) terms (79) theory (213)  
 u Urtheil (138)  
 v Vaihinger (31) Vorstellungsverlauf (101, 155)  
 w Windelband (W.) (302)  
 z zusammenseiendes Mannigfaltige (159) Zusammengehöriges

デューイ論理學說の研究 正誤表

	頁	行	誤	正
正 誤 表	14	5	總說	序說
	50	2	緒論	結論
	123	8	要件	與件
	130	3	B	C
	159	5	Zusammengehoriges	Zusammengehöriges
	213	8	conjectnre	codjecture
	239	5	(二)	(三)

大正十五年五月六日印刷  
大正十五年五月九日發行

不許  
複製



デューイ論理研究

正價金貳圓

著作者 永野芳夫

東京市神田區表神保町七番地

發行者 阪本眞三

東京市牛込區市谷加賀町二丁目十二番地

印刷者 寺井藤左衛門

東京市牛込區市谷加賀町二丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舍

發行所

東京市神田區表神保町七番地  
振替貯金口座東京八七貳番

大同館書店

大 同 館 發 行 圖 書 目 錄

大關増次郎 新著	大關増次郎 譯著	野村隈畔著	吉田熊次序 市川一郎著	中村古峽著	稻毛詛風著	前田徳一著	新井白石著
■カント哲學批判	■カント研究	■ベルクソンと現代思潮	■教育の基礎たる哲學	■變態心理の研究	■改訂増補 オイケンの哲學	■少年の思潮と生活	■讀史餘論
四六判 全壹册	菊判 全壹册	金貳圓五拾錢 送料十八錢	金貳圓五拾錢 送料十八錢	四六判 全壹册	四六判 全壹册	袖珍 全壹册	四六判 全壹册
正價金貳圓 送料十八錢	金七圓八拾錢 送料卅六錢		金貳圓五拾錢 送料十八錢	金貳圓五拾錢 送料十八錢	金壹圓六拾錢 送料十二錢	金壹圓八拾錢 送料十二錢	正價金貳圓 送料十八錢

〔大同館發行圖書目錄〕

宇野 哲人著	宇野 哲人著	紀平 正美著	紀平 正美著
支那哲學史講話	支那哲學史講話	自 我 論	改訂人格の力
菊上製 (參拾版)	菊上製 (參拾版)	四六判 全壹册 (貳拾版)	四六判 全壹册 (八版)
金貳圓八拾錢 送料拾八錢	金貳圓八拾錢 送料拾八錢	金貳圓參拾錢 送料十八錢	金壹圓八拾錢 送料十八錢

本書は上古より清末に至るまでの支那思想の概要を極めて平易に簡明に叙述して最もよく要説を盡くせるものなり從來世に行はれたる支那哲學史の缺陥は本書に依りて補正せられて亦遺憾なし初學者にも専門家にも座右に缺くべからざる絶好の名著なり。

本書は上は三代より下は近世に至り或は一代の思想を概論し或は特殊の問題を細叙し支那哲學に關する博士獨特の研究は殆んど此書に網羅せらるる支那哲學史講話を讀んで略々大意に通ずるものは更に此書に就て斯學の堂奥に參せよ。

本書自我論一編は全く自分の觀念論の上に立脚して組織したるものである従て缺點も多からうと思ふが同時に又自分のものであるとの自信をも有つて居るのである前編「自我の分析」に於ては出來得る限りの分析を試みた後編人格の價値に於ては人格の意義と價値とを論理的に定めんと企てた。

本書は先に一度出版せられしものを「自我論」の出來たと同時に讀者の要求により著者が全部新しく改訂して發表せられしものである「自我論」を讀まれし人も又これから入つて「自我論」を讀まれる人も必ず併讀せねばならぬ重要な姉妹篇である。

大關増次郎著 **カント哲學批判** 四六判 (五版) 正價金貳圓  
送料十二錢

カントより新理想主義へ新理想主義からヘーゲルへの道を辿らうとする者は先づ近世哲學の權威フイッシャーのカント哲學批評を傾聴するの有意義たるは敢て賢言を要しないこれ眞摯なる士にすゝむる所以なり。

大關増次郎著 **カント研究** 最上製 (三版) 金七圓八拾錢  
送料卅六錢

哲學研究者がカントへの隨一の手引書。近代思想のことくくが或はカントを批判し或はカントを祖述しないものは無いのであるから近代思想を極めるものは必ずカントまでさかのぼらなければならぬ本書はその手引書である。

稻毛 詛風著 **オイケンの哲學** 四六判 (十三版) 金壹圓六拾錢  
送料十二錢

オイケンは現代思想界の明星也從つて苟くも思想界に關し精神事業に従事する者にして彼を知らぬ人は未だ到底哲學宗教道德教育文明歴史乃至生活を論ずる資格なし。現代生命に觸れ生き甲斐ある生活を生きんとする者は本書を讀め。

野村 隈畔著 **ベルクソンと現代思潮** 四六判 (九版) 金貳圓五拾錢  
送料十二錢

本書はベルクソンの思を中心として現代の哲學及生活の梗概を述べたものであるだけに獨りベルクソン哲學の特色と價值とを學び得るのみならず弘く哲學的思想を解する上に於ても亦渺なからざる價值がある。

吉田絃二郎著 **タゴールの哲學と文藝** 四六判 (十六版) 金貳圓五拾錢  
送料十八錢

タゴールは所謂近代文明に中毒した歐洲人から清涼劑緩和劑として歡迎せられた。漸く物質文明の弊に苦しみ且つ自我の目覺めに悩みを懷いて來かゝつた吾々青年にはたしかに伸びくした心地よい感じを與へて呉れる。

高橋 敬視著 **西洋哲學史講義** 最上製 (新刊) 金參圓八拾錢  
送料十八錢

哲學を知るにはどうしても哲學史を讀まなければならぬ。本書は古代哲學から最近のプラグマチズム、新實在論に至る迄を組織的に簡潔平明に初學の人にも容易に了解が出来る様に叙述したるものである。

市川 一郎譯 **高尚なる理論を哲學概論** 最上製 (新刊) 金四圓八十錢  
送料十八錢

本書はフレッツチア博士の原書を譯補せるもので内容は用語の簡潔にして平明なるは勿論吾々各自が日常屢々遭遇する所の經驗を例證として講述せる初學者には最もよい入門書である。

石川 誠編 **現代文學新選** 四六判 (三版) 金四圓八拾錢  
送料十八錢

本書は現文壇の中心作家菊地寛・芥川龍之助・島崎藤村・田山花袋・北原白秋・有島武郎等十八氏の代表的作品長短編約七拾篇を収めそれに頭註を施し各編毎に鑑賞的著者獨特の批評を加へたるものである。

石川 誠編 **現代詩歌新選** 四六判 (新刊) 金貳圓八拾錢  
送料十八錢

本書は現代詩歌を味はんとする者及一般文藝愛好者の爲めに趣味的に研究的にその鑑賞手引として出來たもの代表的詞人七拾餘名の歌詞句から精選し脚註を加へし現代詩歌壇の金字塔である。

古屋 利之編 **現代田園文學新選** 四六判 (新刊) 金貳圓五十錢  
送料十八錢

田園は人類の心臓であり太陽である。靡爛しきつた現代人の思想と生活に新しい血をそそぎ温い光を與るものは其處に育まれた田園文學を措いて他にないと信ずる本書はこの意味に於て現代人の渴望を癒すに足る絶好の讀物であらう。

小林 榮子著 **源氏物語活釋** 編前 四六判 (三版) 金四圓八十錢 送料十八錢

小林 榮子著 **源氏物語活釋** 編後 四六判 (三版) 金四圓八拾錢 送料十八錢

全編漢字をあて、講義に代へ頭註精を極め粹を華む。この書を読む人は到底行はれざる源氏物語の全講を居ながら聴くと共に又中古國語辭典を座右に備ふるの効果を收め得べし加之本書の一大異彩として著者研鑽の餘一紫式部の源氏物語は雲隠までなりとの斷案を下したる事と紫式部日記抄講義によりて式部が擾々たる公子貴女を靜觀せるさまの躍如たるを見るべし本書は初めて古文に志す人にも直ちに堂奥の源氏物語を玩味する事を得べき國民必讀の良書也

小林 榮子著 **頭註大鏡活釋** 最上製 (三版) 金貳圓五拾錢 送料十八錢

四鏡中も最も重要な大鏡は藤原氏の榮華と時代用を描いた史的にも文學的にも貴重なる書である本書は著者が難解な文章を流通無礙の筆を以て何人にも了得し得る様活釋した所現代女流國文學者中の才人であると云はねはならぬ

石川 誠著 **新撰徒然草講義** 最上製 (新刊) 金貳圓五拾錢 送料十八錢

本書は徒然草を三部に分ち前編には受驗に尤も必要な徒然草の本質を直ちに了解し得る段を收めて詳解したこれは受驗必讀の篇であり本書の眼目である中篇後篇には受本位として繁簡中庸残りの全部を收めて詳解したものである類書中の白眉の書としてすゝむ殊に文檢と高等學校入學準備としては最適の書である

尾上登良子著 **源氏物語大意** 註頭 最上製 (八版) 正價金參圓 送料十八錢

本書は大意とは云へ文情詞勢語氣なども原本の儘を傳へんと苦心したるものなりされば本書一巻の通讀は原本を讀むに異らざる効果あり巻頭に挿入したる系圖並に年表は本書の參考としては勿論其他一般の源氏物語を研究する人にも唯一の極めて有益のものである。文檢受驗者國文研究者必讀の良書也

小林 好日著 **新體國語法精說** 最上製 (三版) 金貳圓八拾錢 送料十八錢

本書は一名標準語法精說と云ふ文檢受驗者が日本文法研究上必要缺くべからざる参考書である内容は最も進歩したる科學的方法の下に試みられた我現代語の研究書であり文語から口語に至る歴史的變遷を顧みられた比較對照語法である。天下の標準語問題を取扱つたものゝ少い今日に於て國語問題に思を潜める者は必ず一通讀しなければならぬ

吉波 彦作著 **漢文(白文訓讀)研究要訣** 最上製 (三版) 正價金參圓 送料十八錢

文檢國語漢文科受驗の秘鍵を握つて一躍難關通過の榮冠を獲んとするの諸彦は先づ本書を看よ。本書は著者が多年の經驗と豊富な材料とを以て新に受驗者に提供せる他に絶對に類書のない要訣である。第一篇は白文訓讀を第二篇には復文作文を第三篇は支那時文を解釋したる國漢文受驗者には最新の捷徑である

植松 安著 **改訂古事記新釋** 最上製 (拾參版) 金貳圓五拾錢 送料十八錢

難解なる古文を最も平易なる假名交り文に書き下し振假名を附し詳細なる語義と其索引を添ふ。著者か國民心理を基礎として神代と上古との風俗人情に下したる評論的文章は各段章に顯はれ大和民族發展の由來を明にし國民歸嚮の中心を開く是れ本書の特長なり世界の日本東洋の日本我等の日本これをこの書に得よ

植松 安著 **紀記の歌の新釋** 最上製 (三版) 正價金貳圓 送料十八錢

古典の國民化これは私の大に望む所であつて先に「古事記新釋」を著けしたか今又こゝに紀の歌のみに就いて書いて見むには古事記は文學日本書紀は歴史といふ著者の見方である本書にはもとより新論とては無いが只現代の一般人士が讀むには便宜であると思ふ

宇野 哲人著 **四書講義 大學** 最上製 (拾參版) 金貳圓參拾錢 送料十八錢

宇野 哲人著 **四書講義 中庸** 最上製 (拾四版) 金貳圓八拾錢 送料十八錢

龍澤 良芳著 **左傳選釋** 文檢 受驗用 最上製 (新刊) 金參圓八拾錢 送料十八錢

支那古典中最も難解を以て目せられる左傳は文檢受驗の際の必讀書である本書内容は讀方講義解釋參考の四編に分ちて丁寧親切に叙述せる文檢受驗には本書一冊で他に必要なしと言ふまでにした他に絶対に類書の無い好參考書也。

教育學 術會 文檢 受驗用 **論語解義** 最上製 (四版) 金貳圓八拾錢 送料十八錢

本書内容は(一)解説(二)字句講義(三)思想研究の三篇に分ちて叙述し最後に論語思想を現代の思想の上から縱横に批評を試みた文檢修身・漢文教育科受驗者の是非熟讀すべき良書也。本書は實經驗に鑑み本文を特に白文とせり。

教育學 術會 文檢 受驗用 **四書研究** 最上製 (五版) 正價金貳圓 送料十二錢

本書は文檢受驗者の爲めに從來の四書研究難を救はんとして著はされしものである四書の研究は我國に於ても支那に於ても本書がその最初のものであれば從來の文學の上の研究に飽きて居る一般の人は本書に依て味ふがよい。

栗原寅次郎著 **大日本地理精説 上卷** 最上製 (八版) 金五圓八拾錢 送料廿七錢

栗原寅次郎著 **大日本地理精説 下卷** 最上製 (七版) 金五圓八拾錢 送料廿七錢

日本地理教授の目的は専ら本邦國勢の現狀を詳かにして愛國心に基づく有爲の國民的活動に導き事にある。本書は著者年來の經驗に則つて特に最新の材料を蒐集選擇し帝國の國勢を形成せる自然並びに人文の兩方面に亘る各般の事情に就て懇切丁寧に叙述を加へられたる、眞に是れ斯界の權威たるべき良書である。本書の特色は材料の嚴選と其の具體化・學習的興味の喚起・統計の正鴻と記述の懇切等である。

三村 信男著 **地理學習便覽** 最上製 (三版) 金壹圓貳拾錢 送料十二錢

世界的知識を得るには地理を修める必要があり世界的日本を知る爲には地理科は最も適せる教科である本書は此の意に於て技業に亘るを避け稍學術的に一般地理學的現象を解説せるもので深き理法を解し研究の指針となる書也。

栗原寅治郎著 **大日本國勢地理** 最上製 (新刊) 金參圓八拾錢 送料十八錢

本書は我が國土の自然と人文に亘る各般の實情を精査探求し特に平易を旨として記述されたるものにして一般地理教授上の好參考書たるは勿論更に國民の必讀すべき近來の快著である敢て世の愛國の士に薦む。

栗原寅治郎著 **郷土地理の研究** 最上製 (五版) 正價金貳圓 送料十八錢

郷土は世界の縮圖なりで窓外に一步を出ずれば四近の山嶽河川原野等探つて以て本科學習の基礎をなすべき好教材を網羅せるに於てをや本書は特に之が教授の方法を説示する等懇切丁寧に極む眞摯なる研究家必讀の書也。



中等學校教授用資料と検定受験用とを兼備せる唯一の西洋史參考書

◇小林博氏新著 (多年苦心の大著愈完成發賣)

# 文部省檢定 用 西洋通史

東京 大田  
神戶 同  
田 館 行 發

菊判最上製美本 上卷 正價金六圓八拾錢 送料廿七錢

全二册箱入千五百頁 (下卷) 正價金四圓八拾錢 送料十八錢

●●●(書讀必者驗受史洋西檢文)●●●

## 〔色特の書本〕

(一)教授用の便 文部省教授細目と著作・村川・瀨川・大類・磯田・齋藤・清・峰岸・齋藤一の各博士教授の著せる中等學校西洋史教科書を參照し其項目の敷衍につとめ且說話筆記等の取扱にも苦心した

(二)受験の實經驗 文檢受験は著者の苦き實經驗に鑑み選擇配列に頗る苦心して表解圖點を施し極めて多き參考史話を載せ其の興味を以て讀者の倦怠を防ぎたり。故に本書は項目體にして見易く時間を省き腦裡に千萬の史實を牢記せしむるは信じて疑はず

(三)記事の詳密 著者は多年の西洋史研究と共に翻譯の史實を本書に發表しツタンカーメン王の事蹟よりドブス案日露交渉の最近に及び繁簡の要を得たれども尙記事頗る詳密にして多大の頁を費し從來の文檢問題の如きは自ら悉く織込まれたり

(四)文檢問題解答 本は卷末に索引を附して讀者研究の便を計り既往の文檢問題は四十一回迄列記し一々之に解答を附したり

我が初等教育界への一大貢獻!!

◇東京女子師範 附屬小學校訓導 守屋貫秀・山口友吉・久米慧典共著◇

東京神田 大同館 發行

新刊 發賣

# 少年國史辭典

四六判最上製美本 全壹册四百餘頁 正價金貳圓 送料十二錢

少年少女のための國史辭典出來!! 自學自習隨一の指針

少年少女諸君が國史即ち祖國發展の事蹟を眞に自ら學ぼうとするにはどうしても完備せる兒童用國史辭典が必要である。本書内容は五十音別にして國史教科書中の事實を大小漏なく解説せる外各教科に於ける史實を解明し尙御歴代表系圖・年表を附せる等眞に至れり盡せりの良書である。今や自學中心主義の教育は燎原の火の如く全國を風靡し然も教育者の之が參考書の不備を等しく遺憾とせらるゝ時に際し我か勉學に熱誠なる少年少女諸君を初め各學校及一般圖書館の必備品たる本書を提供し得るは大に弊館の誇とする所である

福田正夫著 ●童謠・民謠・詩傑選集 (拾版) 袖珍判 最上製 金壹圓八拾錢 送料十二錢

前田徳一著 ●少年の思想と生活 (新刊) 袖珍判 最上製 金壹圓八拾錢 送料十二錢

大久保龍著 ●白ばら公子 (少年少女の小説) (新刊) 四六判 最上製 金壹圓八拾錢 送料十二錢

◇明治教育社編纂◇

發兌

東京市神田區  
表神保町七

大同館書店

文檢 國民道德要領

(卅壹版)

四六判最上製美本  
金貳圓五拾錢  
送料十八錢

文檢 教育大意

(拾七版)

四六判最上製美本  
金貳圓五拾錢  
送料十八錢

本書國民道德要領教育大意は姉妹篇で共に絶大の好評を博しつゝあり内容特色は合格者の経験を基礎として編纂したる事、そして受験者に都合よき様に記述したる外試験委員の説を随所に挙げたる事、問題解答を提げ類似問題を多く載せたる事、文章の平易なる事等にあり、されば文檢の受験者たるものは勿論各府縣の小學校教員檢定試験者にとりて無二の好参考書たる事は弊館の自信を以て推獎せざる可なり。

教育學術會著

●文檢 教育勅語成書解義

(拾版)

正價金貳圓  
送料十二錢

石川 誠著

●文檢 國語科研究者の爲に

(拾貳版)

正價金貳圓  
送料十八錢

石川 誠著

●文檢 漢文科研究者の爲に

(拾貳版)

正價金參圓  
送料十八錢

伊東勇太郎著

●文檢 英語科研究者の爲に

(五版)

正價金貳圓  
送料十八錢

教育學術會著

●文檢 國民道德教育大意問題解答

(五版)

正價金壹圓八拾錢  
送料十二錢

◇渡部政盛氏新著

(最新最詳の世界教育全史出來)

文檢 日本教育史

菊判最上製美本  
全壹冊九百頁  
正價金  
六圓八拾錢  
送料金廿七錢

本書は既刊教育史の一般的缺陷を補ひ併て文檢受験者の好件侶ならしめん爲に著されたるものなり。特色とする所は(一)日本西洋西洋とも古代より現今(二十世紀)に至る迄の史實を全部網羅したる事(二)從來の教育史に無き支那以外(三)の亞細亞諸邦の教育及日本新領土植民地の教育をも記述せる事(三)系統的にして簡單明瞭ならん事を努めたる事(四)從來問題として出でたる事項につきては特に詳細なる擬答的解説を試みたること(五)練習問題を挿入したる事等なり故に教育史の研究は本書一冊にして十分なることは言ふ迄もなし

五版 集說 教育學概論

本書内容は(一)歴史批判(二)事實教育(三)現代思潮批判(四)目的々本質的批判に立脚して最眞最善の教育原理を闡明し實際教育に對して最も根本的なる規範を提供したのである。教育一般を研究の對象として科學に立脚しながら哲學を忘れず、教育の意義・教育學の概念を諸方面から縦横に考察論明した。系統的てふ形容の意味は本書に於てのみ味ふことが出來やうかと思ふ。今や改訂修正して益々研究の便宜を計れり。

東京市神田區  
大同館發行

◇稻毛詛風氏新著◇

東京大同館藏版

# 新刊 教育哲學の研究

菊判最上製本  
全壹册四百頁  
正價金  
四圓五拾錢  
送料十八錢

我學界に『教育哲學』の名を開く事は可成に久しいにも係らず未だ眞に權威ある教育哲學書を見ないのは遺憾である。この際斯學研究の唯一人者たる著者が本書を公にしたのは洵に時宜を得たものである。本書は一方内外の代表的教育哲學を忠實に紹介し嚴密に批判すると共に他方著者自身の教育哲學觀を系統的に叙述したものであるが故に此一巻によつて教育哲學の一斑と著者の見解の眞髓とを理解する事が出来る教育と哲學との關係について疑惑を懐く者哲學を教育上に活用せんとする者教育哲學を研究せんとする者乃至眞に有爲な教育者たらんとする者は必ず一本を繕いて此新學術の醍醐味を味はらうべきである。

稻毛詛風著 ●教育者のための哲學 (拾五版)

貳圓五拾錢  
送料十八錢

稻毛詛風著 ●改訂 增補 オイケンの哲學 (拾參版)

壹圓六拾錢  
送料十二錢

稻毛詛風著 ●哲學入門 (三版)

壹圓六拾錢  
送料十二錢

稻毛詛風著 ●現代教育の主潮 (最新刊)

貳圓八拾錢  
送料十八錢

◇文學博士 吉田熊次序 市川一郎譯著 (現代教育者必讀の要書)

# 拾九版 教育の基礎たる哲學

四六判最上製本  
全壹册四百頁  
正價金  
貳圓五拾錢  
送料十二錢

哲學は難くして常人不理解のものなりと思ふ人多きは從來公にせられたる哲學書の罪である本書は卑俗に流れざる程度に於て最も平明に最新の哲學を系統的に叙述せるもので之れを繕かば哲學的素養の皆無なる人士と雖も易々として現代哲學の概觀を捕捉し健全なる哲學的的人生觀教育觀を樹立し得べく以て從來と全く異りたる意義あり價值ある新生命を開拓し得んこと疑なし。

◇市川一郎氏譯著◇ (文部省は勅令を以て社會教育課を新設す)

# 三版 教育の基礎たる社會學

四六判最上製本  
全壹册四百頁  
正價金  
貳圓  
送料十二錢

本書は米國碩學の近著に係る應用社會學の一なる教育的社會學に據て社會學の主要なる原理と此原理に立脚する教育の社會學的解釋とを講述せるものである。過去の因襲教育が心理學に依て改造せられたるが如く、行き詰れる現代の教育は是非社會學に依て改造されなければならぬ。實に本書の説く廣大にして根本的なる教育説は狹隘なる天地に踏躐せる今日の教育を廣潤清朗なる曠野に誘導するものである愛國の士の必讀を要請す。

發兌 東京市神田區 大同館書店  
表神保町七

◇渡部政盛氏監修・教育學術會編纂◇

文檢用 **心理學講義** (最新刊) 菊判上製七百頁 金四圓八拾錢 送料廿七錢

文檢用 **論理學講義** (最新刊) 菊判上製四百頁 金參圓八拾錢 送料十八錢

文檢用 **教育學講義** (第貳版) 菊判五百餘頁 金參圓九拾錢 送料十八錢

本書も文檢教育者必讀の用書として叙述せるものにして内容は所説平易公平よく委員や學者の説を攝取調和し以て受験者に無二の伴侶たらしむべく努めた。教育科受験者は何を措いても本書につくがよい。本書の程度は師範學校教科書よりは稍高く學者の専門書よりは平易である。斯く云ふも論究すべき題目は受験の立場から見るとして欠きしものはない。補や註には學者の説を収めた。要領! 要領! これが受験に最も必要である。

◇文檢研究會編纂◇ (模範的實際的答案を示す)

文檢用 **修身科問題詳解** (三版) 四六判最上製美本 金貳圓五拾錢 送料十三錢

本書は最近十箇年の文檢問題を檢定委員學説を斟酌解説し且つ最新進歩の學説を加味して最も要領を得たる模範的實際的參考を示せる外類似問題を蒐集し又一々參考書を掲げ受験者の自習試練に多大の便宜を與へるものである。

◇醫學士 井上金輔・奥山壽太郎・木山淳一・額田勇共著◇

**生理衛生教授の理論及實際**

(好評五版) 新文化の建設に當り國民の體育を振起し 菊判最上製美本 全壹册四百頁 正價金四圓 送料金十八錢  
して學校衛生學も近來勃興して改革の必要なるは示明の事なり。而して全壹册四百頁 正價金四圓 送料金十八錢  
生の教授正鶴を得ず從つて兒童生徒は自らの衛生に盲者の如し著者これを遺憾として本書を公にす、本書を用るば兒童生徒は趣味津津の中に生理衛生の知識並に實行法を會得するは期して待つに似たり。今更躊躇するは愚、購ひて教授に試む者賢と示ふべし。

◇桐生高等工業學校教授 島田慶一氏著 四六判最上製 全壹册三百頁 正價金貳圓 送料金十二錢

**家庭日常飲食物の知識**

(好評五版) 本書は吾人が日常一日も缺くべからざる重要な食料品の全般に亘つて其由来・沿革・原料製造法・營養價値・貯藏法・鑑定までも平易に簡明に何人にも了解し得る様講話せるものにして發行以來絶大の好評を博し版を重ねる事數回發行益々増加す。一般家庭は勿論各學校の家事科理科の教育參考書としても好適のものなり。

發兌 東京市神田區 表神保町七 大同館書店

東京市神田區表神保町七 大同館書店

◇渡部政盛氏新著（隨一の民衆哲學辭書提供）

# 版六 最新哲學辭典

（本書の特長）

（一）現代文化民衆の哲學感を充すを目的として編纂したる事（二）文章平易記述簡宜しきを得て一讀直ちに其要點を捕捉し得る事（三）内容は哲學概論・東洋西洋哲學史・倫理學・東洋西洋倫理學・論理學・美學・宗教・社會學・經濟哲學は勿論・生物學・心理學・哲學藝術上の最近思潮特に現代哲學の記述に萬遺憾なからん事を期す（四）所謂廣義の哲學以外現代の文學藝術社會問題經濟問題政治問題婦人問題等にも互りたる事（五）學生及文檢受驗者の便を計り史上の問題を詳述したる事（六）文化生活への奉仕として正價を最低至廉ならしめ其の普及を圖つた事等である要するに本書は現代人に缺く可らざる哲學の鳥瞰圖ともいふべき書也

◇東京豊島師範學校教諭 栗原寅治郎著（好評激甚増版出來）

# 版壹拾 改造世界地理精說

本書内容は材料選擇に當りて特に我國との關係的方面を重視し世界の大勢に通ずると共に直ちに彼我劃下の形勢を理解をしめ今後の國民として國家的生活を營むに十分なる資料を自然人文の兩方面より精査して集むるに努めたり要するに世界地理參考書として現代では本書を以て第一なりと大なる自信を以て推奨する所以なり

發兌 東京市神田區 大同館書店  
表神保町七番地

菊判最上製美本  
全壹册七百頁  
金五圓八拾錢  
送料廿七錢

◇三村信男氏新著

（菊判最上製美本 全壹册八百頁 正價六圓八十錢 送料金廿七錢）

# 版三 地理學通論

（地文學の部）

僅の努力にて多大なる習得を目的として叙述せり地理學は其の範圍頗る廣く之が研究に多大の不便と苦痛とを感ずるものである。而して其の地理學の實典！各學校及文檢受驗者必讀の參考書。由の一として綜合されたる地理學の良書の無一事である。本書は各種學校に於ける地理教授者は勿論文檢受驗者の爲に僅の努力にて多大の習得を目的として最新の學說に基き著述せるもので内容は地文地理事項を細大漏さず之を詳説し百數十個の挿畫によりて内容を明かにし且終りに詳細なる索引を附し之を利用する時は本書は實に地理學の實典となものである。

◇東京豊島師範學校教授 栗原寅治郎著 菊判最上製美本 全壹册五百餘頁 正價金四圓 送料金十八錢

# 版五 日本産業地理精說

大戰後の世界各國は果して經濟上の恢復に努め國民經濟の根本を究めて之が永遠の大計を樹てつゝあり我國の經濟界は果して激烈なる國際的の平和戰に服すべき豐富なる準備と最善の努力とを覺悟しつゝありや本書は我國の主要産業に就て古來發達の過程を明かにし内地及新領土に於ける最新の材料に基きて記述平易懇切を極め一讀帝國財源の基盤を詳述して一般實業家の參考に供すると共に各種學校の參考資料とす。確實なる誠實に時局に適する良書たるを確信す

發兌 東京市神田區 大同館書店  
表神保町七番地

各學校及  
實業界の  
必備書!!

書良き可ふ備を本一非是に校學小

▲教授用と檢定受験用とを兼備せる隨一の國史參考書▼

國學院大學 師文學士 岡部精一氏 高橋與惣氏共著

拾壹版 文部省檢定 大日本歴史 試験問題對照

菊判クローズ製最上美本 紙數九百五拾頁 全壹冊 金七圓五拾錢 郵稅十六錢

本書は各種學校の國史科教授の參考に供し兼て各種の受験準備に資せんが爲めに編纂せるものにして教授參考に供する方法としては現行文部省の中等學校及小學校の教授細目を基礎とし之れを適宜配合して編纂を分ち國史の本幹を形成せる事實を精細に通説し又古今史學家の發表せし新説の穩健なるものは努めて之れを採録せり。試験準備に資する方法としては第一回より第廿六回に至る文檢試験問題を發題者の要求を推究探尋して一々精密に解釋し盡く各章末に添附せり。加ふるに編者多年の經驗と研究とを以て些の遺漏なきを期したれば諸學校に取りては繁簡適宜あらゆる重要史實を網羅して餘蘊なき最も完備せる國史參考書たるべく檢定受験者殊に小學校教員諸氏に取りては教授用と受験準備用とを兼備せる斯學隨一の羅針盤たるべし。

發行所 東京市神田區表神保町六番地 大同館書店 振替貯金口座東京八七貳番

東京高等師範 學校教授文學士 中村久四郎先生 高橋與惣先生新著

拾壹版 文部省檢定 東洋通史 受驗用

菊判最上製美本全一冊紙數九百餘頁正價金五圓八拾錢郵稅二十錢

本書の組織は現今中等學校の教授細目を適宜配合して四編六拾五章に分ち著者多年の實地的經驗を基礎とせる獨創の排案に據り上下五千餘年に亘れる諸民族の盛衰興亡より政治・風俗・學術・文藝・宗教・制度の一切を網羅し東洋史實を盡く有機的連絡の下に最も平易正確懇切に通説せりそして從來の東洋史の最大缺點たる記述の無味乾燥及び繁雜に過ぎずば簡易に失せる缺點・地名人名の難讀・官職の難解等を補ひし外古今東西史學者の披瀝せる學說の穩健なるものは努めて之を採録し一々出所出典を明示して研究者の便に資せり。又文部省檢定試験問題の第壹回より最近に至る迄の分を盡く明瞭に解答し之を本文の間に分載し以て受験者に一大秘庫を提供せり。要するに本書は文檢受験用の名を冠すと雖も一切の史實を通説せるは勿論古來日支兩國の關係殊に最近世東洋外交上の事件人物を詳説したれば皆に中等教員小學教授參考及文檢受験者の一大秘庫たるのみならず史學研究者世の識者も亦座右に備へて大に裨益なかるべからず。

東京 大同館發行

文部省通俗教育圖書認定濟

東京大同館發行

西川祐著

文化基調 化學工業講話

四全 貳送 六一正 圓料 判冊 最五價八 上五價八 美百金拾八 本頁 錢錢

(内容目次の一斑) 化學工業の領分とその沿革 化學工業の範圍... 發達の跡... 展開しつつある化學工業 空中の寶、窒素の利用 生か死か... 智利硝石... 人智は無限... 空中の寶庫... 世界の大勢と我國... 固定方法 硝子工業 漂流の恵... 七寶の一と數へられた... 日代の現況... 硝石の生體... 硝子になるまで... 生活と硝子 臺所の石炭瓦斯 石炭瓦斯の來歴... 家庭に於ける瓦斯... 文化生活と瓦斯... 動力に使はれる瓦斯 護謨の一代 今日の護謨工業... 護謨の加工仕上... 皮より革へ 革の種類... 製革工業の過去と現代 砂糖 砂糖か藥... 文化生活と砂糖 石鹼物語 石鹼の生立ち... 日常使用の石鹼... 石鹼の良否 最近の色素工業 天然染料の驅逐... コールタールから色素... 何様な人造藍の製法... 色素の人類奉仕 衣服の染色 染まる理由... 染料の妙味 セルロイド 人形 セルロイドの長所と現況... 原料の献立... 製造の梗概... セルロイドの世界 人造絹糸 人造絹糸の發明... 人造絹紙の應用と現在將來 製紙工業... 日本酒... 麥酒の醸造... 食鹽の話 山の食鹽と海の食鹽... 食鹽は工業の基礎 燐寸 燐寸發明の序幕... 我國の燐寸工業 セメントとコンクリート セメント工業の現況... 鐵筋コンクリート 陶磁器... 電鍍工業 電陽の意味... 電鍍の役 香料と生活 香の世界... 香料の進化... 香料採製の諸法... 主なる芳香油 石油 燃ゆる水... 世界の石油... 石油時代來る... 油田の爭奪に熱中する列強... 石油の起原と油田發見方法

●新定國史教授用參考書として最も完備せる書●

京都府女子師範學校教諭 德重淺吉 同訓導 吉良佐太郎 共著  
京都府女子師範學校訓導 松本正男 同訓導 内藤孫一 共著

東京 神田 大同館 發行

史眼養成 國史教授の原理及實際

菊判最上製美本 五學年用(上卷)正價 參圓五拾錢 送料十二錢  
全貳冊千二百頁六學年用(下卷)正價金四圓五拾錢 送料十八錢

拾 版

近世日本の教科的新解釋  
國民思想養成の鐵案  
世の移り行く道理の究明  
史眼養成の眞教授法

現代國史教授界に於ける重要な諸問題には觸れざるなく上巻と相俟つて其の完璧を期せり。敢へて世の眞理を熱愛する教育家に一本を勸む。

標に本書上巻を出して世に問ふや教授參考書中の白眉として多大の推賞を蒙りしが爾來著者思を湛むること正に一年慘憺の苦心を嘗めてこゝに年々の蘊蓄を傾盡せるもの即ち本書下巻なり。而して今回は精刊適確なる解説に加ふるに卓抜清澗なる批判を各項に設けて教授の徹底を計り教材も教科書以外に皇太子殿下の攝政なる一章を加へて英皇儲御來朝迄の最近の事歴を述へ終りに國史教授の基本問題史眼養成の方策等苟も

醫學博士 羽太銳治氏新著 (類書中の白眉)

拾參版

# 性慾教育の研究

四六判最上製本  
全壹册五百頁  
正金 參圓  
送料十二錢

著者先に獨逸國に留學して生殖器學性慾學を専攻して研究甚だ力む。其の帶歐中伯林にてウエデキンドの「春の目録」の實演を見て青少年少女が性慾上の悲劇に深き印象を得たりしが歸朝後我國が此の大問題なる性慾教育の點に於て一冊の見るべき書なく且つ其半面には彼等をして一刻に危險と暗潮に導きつゝある現狀を見て憂慮措く能はず今や進んで其の修養を吐露して本書成る内容は性慾教育の意義より其の裏面が如何に驚嘆すべき事實を成しつゝ有るかを進んで詳説し青年諸君は勿論教育家各學校教職者は何を置きても是非一度本書を必讀するの要あるべし。

目次  
第一章 性慾の生理  
第二章 性慾の心理  
第三章 性慾の教育  
第四章 性慾の衛生  
第五章 性慾の犯罪  
第六章 性慾の病  
第七章 性慾の療法  
第八章 性慾の社會  
第九章 性慾の歴史  
第十章 性慾の未來  
第十一章 性慾の結論

三版

# 生殖器崇拜の教話

袖珍最上製本  
全壹册美本  
金六拾錢  
送料四錢

(上田恭輔著) 本書は流行の風潮に乗せんとする際物出版ではない生殖器崇拜に就て古今の面白き事實傳説を宗教的意義を説ける頗る趣味多き書である。

發兌 東京市神田區 大同館書店

奈良第四小學校訓導 中谷芳藏著 (三色版拾貳葉挿入)

# 最新 美的 陶治 パステル畫の實驗

四六判最上製本  
全壹册美本  
正金 八圓壹錢  
送料 八十錢

〔圖畫教育の一新生面を開拓する書〕 全盛を極めたクレイヨンの時代、最早行は我國圖畫教育の使命を負ふて最も價値ある一生を開拓することには既に世の識者及實際家の疑を容れない所である。本書内容は先づ巻頭にパステル畫の兒童作品十二葉を最も鮮麗な三色版として挿入して範を示しパステル畫實驗の實際と一般圖畫實驗の理論及實際を著者の深き經驗的根柢から最新教育思潮を通して最も平易に論述せるも小學校及中等學校圖畫教育の實際にたづさはる教育者諸氏は勿論美的藝術生活者流の是非一讀を要する要書たることを信じてやまないのである。

稻毛詛風氏新著 (熱血の氣面に横溢せる著述)

# 拾壹版 若き教育者の自覺と告白

四六判最上製美本  
全壹册三百餘頁  
正金 圓八拾錢  
送料 十二錢

著者一度教育界を去るや之れが謀反者と自稱す。而も斯界と小學教師の運命を思ふ一念切々の熱誠は遂に勃發して本書をなす。本書は正しく教育界に對する覺醒の警笛也。奮勵と慰安とを與ふる福音也。滿天下の有爲なる教育者共鳴する悶々の哀情を披瀝せる者は本書也。氏が犀の炯眼は教育者の内生活と教育界の眞情とを抉剔して呈す小冊無く火の如き熱烈の言辭と花の如き多趣なる筆致とは人情の機微と學理の精到とを經緯して百花燦爛の觀を呈す小冊無れ共全卷一の空言なく熱誠の氣紙面に横溢充實す加ふるに多感にして自勵の人たる氏が意氣あり趣味ある前半生は觀照眼と批判によりて瀾麗の筆致となし最大膽赤裸々に告白せらるる意義ある生活に生きんとする者は速に本書を讀め。自己に自覺せんとする者は本書を讀め。教育者の眞價を知り權威を高めんとする者は速に本書を讀め。



著者の尤も自信ある創新文作集

早稻田大學講師 吉田絃二郎氏新著

# 生命の微光

四六判最上製美本  
全巻册總數五百頁  
正價 金貳圓  
郵稅金八錢

## 第三卅貳版

「力は孤獨から生れる！」この人生の見方は非常に淋しい。けれど、捨てられぬほど懐しい生活の力を私に與へた。兄弟を捨てて友を命の廣野に孤獨の影を見出した時、私だけの人生の悠久な寂寞と運まるのではあるまいか。光りなき絶望の底から光りが生れ愛なき嫌人の臆病な心の底から温かい人間愛が生れるのではあるまいか。私は此心弱い生活者の收穫の中から創作五篇と卅餘篇の感想を纏めることにした。暗の底に低徊せる孤獨者のいのちの微光を求むるかすかな祈りの聲として(著者)

(内容目次)  
 孤獨者の心……罪人の涙……啄木鳥……旅から旅へ……  
 淡紅のテウルフ……孤島の春……やなぎの芽生……  
 夜の汽車……馬關海峡……或る朝……大學正門前……  
 寒い日であつた……この秋……八丈島に行つた女……  
 武蔵野の秋……母の愛……秋雨の日……三十の彼……暗  
 と悲哀とから……ロシヤへ行かんとする青年に……曇り  
 日……大地は呻けり……

東京市神田 大同館發行 表神保町七

◇小林榮子女史校訂 (四六判最上製 美本八百頁) 正價金參圓八拾錢 (送料金 十八錢)

# 近松世話淨瑠璃集成

本書は近松の靈筆に成れる世話淨瑠璃の院本廿四編を輯めて現代人にも容易く其妙趣を味はしむべく難解の俗語・古典の成語には特に妥當なる漢字を充てたる校訂者の苦心によりて千古才人の絢爛たる筆致は更に幾段の光彩を發揮して讀者の眼前に展開せらるべし。近松の作を多く讀たる人も初めて近松の作に接せんとする人も讀め。

◇小林榮子女史校訂 (四六判最上製 美本千餘頁) 正價金五圓五拾錢 (送料金 十八錢)

# 近松時代淨瑠璃集成

近松近いて既に二百餘年世に其の天才を讃嘆する者益々多きを加ふるは偶然にあらず就中其の時代淨瑠璃は趣向の雄大なる描寫の鮮麗なる文章の雅健なる後世作者の到底企て及ばざる所なり。今其中に於て殊に傑作中の傑作と稱すべきものを精選し川語には一々適當なる漢字をあて故事には一々正確なる考證を加へて本書を成せり眞に近松を知らんとする人は讀め。

◇佐賀高等學校教授 文學士 高木 武著◇ (好評激甚)

# 四版 受験 新選漢文要義

四美判最上製 六本 五頁 壹圓拾錢 送料八十錢

本書は各種高等學校入學志望者小學校教員諸氏及一般學生諸君が自習の参考用書として漢文の眞髓を成可く迅速正確に會得せしむ可第一編文法要義には名詞、代名詞、動詞、形容詞、助動詞、副詞、接續詞、感動詞、訓點の附け方等を解き第二編には誤り易き似字を第三編には誤り易き同訓異字の辨第四編には誤り易き字音假名遣の辨第五編には誤り易き熟語を解き尙故事成語要義を添へ一々比較對照し記憶判別に便利なる様特に意を注ぎて記述したり『萬朝報』本書を評して曰く親切に解きあれば學徒の利便尠からざる可しと必ずや各位が机上の便覽たるべし。

東京市神田 大同館發行

## 受験者の一大福音

◇文檢研究會編纂◇ (類書中の白眉)

### 文部省檢定 各科受験者の手引

四美判最上製 全壹冊 九百頁 參圓拾錢 送料十八錢

本書の特色は

試験委員の從來發表されたる談話は盡く蒐集して受験者の注意しなければならぬ大綱を説いた。そして各科合格者の經驗談を多數集めて必讀參考書時間の利用法研究上受験上の諸注意等荷も受験者の心得なければならぬ事項を細大となく説示した等受験者は何事を描いても先づ本書を熟讀玩味しなければならぬ。

◇小林榮子新著◇

東京神田 大同館藏版

# 新刊 源氏物語活釋

四六判最上製 美本全二冊 紙數總計 壹千八百頁 送料各十八錢

文檢受験者 必讀の名著

前編金四圓八拾錢 送料十八錢 後編金四圓八拾錢 送料十八錢

## 源氏物語の理想

著者が源氏物語を禮讚の心は凝つて同好の人が一人も多く欲しくなりました。幾度も講義體にしたり現代語に譯したのを惜氣なく皆捨て、例の漢字をあて、本文を釋する獨特の方法に出る事とし頭註には煩多な古註の中から首肯し得るもののみを採りて漢譯佛典故實に照し考へ謬見と思ふ所もしくは古人の言及せぬ不明の箇所を解決し禪家の謂ゆる活釋の意に背かぬものと自信して爰に世界に於るべき日本文華の精髓源氏物語を一般人士に推奨いたします。本書は初めて古文に面接する人にも直ちに堂奥の源氏物語を了解する事が出来ます。

- 〔前編〕目次……桐壺……簪木……空蟬……夕顔……若紫……末摘花……紅葉賀……花宴……葵……賢木……花散里……須磨……明……濡檉……蓬生……關屋……繪合……松風……薄雲……朝顔……少女……玉鬘……初……胡蝶……螢……常夏……篝……野分……行幸……藤袴……眞木柱……梅ヶ枝……藤末葉……若菜上……若菜下……(以上)
- 〔後編〕目次……柏木……横笛……鈴蟲……夕霧……御法……幻……雲かくれ……匂宮……紅梅……竹川……橋姬……椎木……總角……早蕨……寄生……東屋……浮舟……蜻蛉……手習……夢の浮橋……紫式部……記抄……(以上)

◇石川 誠氏新著◇

東京神田 大同館發行

### 五版 萬葉集古今集選釋

四六判最上製本  
全壹册五百餘頁  
正價金參圓  
送料十八錢

（和歌入門者の必讀書）本書は古來歌人の金科玉條として、格式し來つた萬葉集・古今集・新古今集三部、檢受驗者諸君・各種學校受驗者・學生諸君及び和歌初學者の便を計り懇切丁寧な註解を施したものである。猶三歌集の詳密なる解題和歌史概要及三歌集參考書の解説を添へたものである。されば本書一巻で和歌史中の太古から現代に至る各時代の作例數百首を通觀し得る正に歴代和歌集を兼ねたものと云ふべき書なり。

◇文學士 小林好日氏新著◇（文檢受驗者必讀の要書）

### 三版 新體國語法精說

菊判最上製本  
全壹册四百頁  
貳圓八拾錢  
送料十八錢

本書は最も進歩したる科學的方法の下に試みられたわが現代語の研究書であり文語から口語に至る歴史的發展を顧みられた比較對照語法である。音韻論品詞論から文章法論に至るまで懇切周到なる説明を施したもので國語の記述的・文的・的であり理論的文典である。本書は又半面から見れば標準語の研究書であり標準語問題の理論的研究である。特に心理的・原理から研所なる説明を試みよらんとするが如きは煩瑣にして無味乾燥なる普通の語法書と其の撰を異にしてゐる。初等中等を問はず國語教授に推はるもの必ず座右に備ふべき參考書なり。

◇小林一郎氏新著◇

（著者が敬仰の熱情遂に本書を成す）

### 四版 芭蕉翁の一生

四六判最上製美本  
全壹册約六百頁  
貳圓八拾錢  
送料十八錢

其の生前に於ても死後に於ても芭蕉翁の如くに多くの崇拜者をもつて居る人は古今の詩人文士中に曾て例の無いことである。此の如き人の一生は何人も之を研究して見て大なる教訓を得べきである。著者は俳諧の専門家では無いが翁の作を愛誦すること既に三十年翁を讀る上に於ては一種の自信をもつて居る。隨て著者は此書を現代の各階級の人に薦めて其の批判を得ることを熱望して居るのである。

◇小林一郎氏新著◇

（芭蕉愛好者必讀書）

### 新刊 芭蕉句集評釋

四六判最上美本  
全壹册四百頁  
貳圓八拾錢  
送料十八錢

（趣味と修養）古今の詩人文士の中で芭蕉翁ほど多くの崇拜者をもつて居る人はあるまい。翁は俳人として優力を與へる。翁の句集は何人も共に讀むべきものである。著者は全く素人であるから此の評釋は其道の人から見て種々の文句もあらう併し素人にして初めて捉へ得る所も多くあらうと思ふ。既に翁を知つた人にも未だ知らぬ人にも是非必讀を希望する。

發兌 東京市神田 大同館書店

◇小學校・中學校・女學校用趣味の課外讀本出來!!

◇森山右一氏新著 最上製 正價金貳圓 送料十八錢

最新刊

# 和歌俳句自習讀本

本書は「和歌が作つてみたい」「俳句はどうしたら作れるだらうか」といふ小學生の爲めと「和歌俳句を研究したい」と望む中學生女學生の親切な入門書として生れたものである。特色とする所は綴方の藝術化||和歌俳句の導入||に資すべく圖れると「作り方」の篇に例歌例句を多く挿入せると「註釋」の篇に新しき歌句數百首を選載せる事である。行文平淡にして水の如く歌句優雅にして花の如く讀去り讀來れば初歩者には無二の指導たるべくすでに入れる者には必ずや詩心のとみにゆたけく伸び行くを覺えるに至るであらう。敢て一本を大方の前にすすむ。

次目内容

〔上編和歌の部〕…子供の和歌…自分の實感…動の歌と靜の歌…景の歌と心の歌  
プロットとローカルカラー…倒置法と反覆法…「なるほど」歌と「さうですか」歌…和歌の日記…和歌と旅行…和歌のうつりかわり…少年歌ことば…和歌評釋…古歌百首  
〔下編俳句の部〕…子供の俳句…季節と切字…少年歳事記…客觀句と主觀句…ポイントと餘情…配合法と擬人法…「しまった」句と「ゆるんだ句」…日記と俳句…旅行と俳句…俳句うつりかはり…子供俳句かるた…俳句評解…古句百吟…

compensator

東京市神田區 大田區 表  
振替貯金口座 大田區 表  
東京市神田區 大田區 表  
振替貯金口座 大田區 表

◇東京府立女子師範學校訓導 守屋貫秀・奈良島知堂著 四六判最上裝 美本繪畫入 正價金壹圓八拾錢 送料金十八錢

忽三版

# 少年會我物語

日本古來の仇討で第一に數へられる會我兄弟の物語を少年の讀物として書かれたものである。仇討の中には封建時代の遺物として面白くないものもあるが會我兄弟の如きは孝子の切なる情と幾多の苦心經緯や堅い志操が感激させる。中學校女學校の初年級及小學生の讀物として適當な良本である。

—(新刊月報評)—

次目内容

金石の悲しみ…祐經の無念…祐親狙はる…狩場の酒宴…河津侯野の相撲…赤澤山の露…兄弟も會我へ…大見八幡の首…哀れな千鶴…頼朝の擧兵…鎌倉の覇業…雲居の雁…怨めしの使者…由比ヶ濱邊…重忠の申請ひ…母の狂喜…敵に對面…箱王の元服…母の勘氣…臆病な小治郎…淺間の狩…怪しの者討取れ…哀れな鹿の聲…與一の立腹…和田の酒宴に草摺引…小袖乞…勘氣赦免…惜しき別れ…懐しい故郷の森…矢立の杉…箱根の暇乞…狩場の勇ましき…無念の射損し…敵を前に亂拍子…和田義盛と梶原景季…主従の訣別…嚴しき咎立…嬉しや本望成就…十番斬の勇しき…祐成の討死…女姿の五郎丸…御前の尋問…時政の最後…大團圓…

東京市神田區 大田區 表  
振替貯金口座 大田區 表  
東京市神田區 大田區 表  
振替貯金口座 大田區 表



252
251

終

